
世界樹の落とし子へ

アラヤシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹の落とし子へ

【Nコード】

N8855V

【作者名】

アラヤシキ

【あらすじ】

世界樹の落とし子「ディセNDER」

この話は、そんなディセNDER「カウス」に接触を試みたある一人の男から始まる。

く黒い神父と護衛依頼く（前書き）

続きものの第一話です。また、題材がレディアントマイソロジー
2のため、ディセンドラーとして私のオリジナルなキャラクターが出て
きます。

ご注意ください。

く 黒い神父と護衛依頼

プロローグ 『黒い神父と護衛依頼』

『君は、世界が美しいから救うのかな？』

- 1 -

「護衛任務？」

朝食を済ませたディセNDER、カウスは、機関室でチャットから依頼の詳細を聞いていた。

カウスは銀色の髪と、緑色の瞳が特徴的な、柔らかい雰囲気をもった少年である。

後ろ髪はあえて伸ばしているのか。長い後ろ髪をゴムでまとめている。

青を基調とした半そでの上着に、黒の長ズボンというカジュアルな格好に、それには似つかわしくないような長剣を腰からぶら下げて

いる。

鞘は銀色に輝いている。ちょっとした曰くつきの剣。カウスにとっては自慢の一品である。

「はい。ちよつと変わった依頼なんですけど・・・」

そう言いながら、チャットは依頼内容が詳しく書かれた書類をカウスに手渡す。

手渡された紙に一通り目を通すカウス。

「ふんふん・・・へえ。依頼主と一緒に行動するのか。変わってるね。いつもは、目的の品を取ってきてくれ、とか・・・そんな感じなのに」

危険があるからアドリビトムに依頼を出しているはずなのでは、とカウスは疑問を持った。

「依頼人の話だと、目的の品を見つけるのは簡単じゃないらしいです。」

専門家の自分が行かないと見つけづらいから、僕達にはその護衛を頼みたいそうですよ？」

チャットが詳細を説明する。

「専門家って・・・この人、『神父』だよ？」

だが、カウスはさらに疑問を深めた。

書類に書かれていた依頼人の個人情報によれば、この依頼人はとある村の教会の神父として生活しているようだった。

神父が専門家であり、見つけたいもの？

はて、それは何であろう。

もしかして

「悪魔退治でもしようってんじゃ・・・」

カウスはそう思い、呟いた。

ネガティブネスの光景を思い出す。

あそこにいた強力な魔物たちは、悪魔と呼ぶにふさわしいものだったと、カウスは思った。

「いやいや・・・よく見てくださいよ。

目的の品は『メディアの涙』ですよ」

そう言つて、チャットは別の紙をカウスに手渡した。

カウスが受け取る。そこには、何の変哲も無い草の写真が貼られていた。

「えーと・・・雑草？」

素直な疑問を口にする。

チャットは呆れた表情をした。

「洒落た名前ですよ。 薬草の一種らしいです」

なるほど、とカウスは思った。

確かに、この写真の通りの見た目ならば、素人にはわからない。

だって、どこからどう見てもそこらへんに生えている雑草と何ら変わらな

素人にはどうやって見分ければいいのかわからない品だった。

「どうですか？この任務・・・請けますか？」

チャットが聞いてくる。

「うん、いいよ。前の仕事もひと段落したところだったし。
えーと・・・依頼を受けられる人数は、何人？」

「この依頼は四人で請けてもらいます。依頼主のほうからそういう
要請がありましたから。
依頼主からはちゃんとお金を貰っていますし、四人分の人件費くら
いなら払えるそうです」

人件費なんて言葉、チャットから聞くと妙に違和感を感じるが、こ
れでも経営者である。

今回の依頼主は、自らの護衛を頼んだ。ということは、護衛の人数
が増えれば増えるほど依頼に掛かるお金は増えるということである。

（アドリビトムのメンバーなら、そんな事気にせず大人数で護衛を
しそうな気もするけどね）

そんな事を思いながら、カウスはこの依頼を受注することをチャッ
トに告げた。

「じゃあ、次はメンバーを決めましょうか。
あと三人・・・今、船の中にいるメンバーの中で手の空いている人
を探しましょう」

そう言つて、チャットは別の書類をめくり始める。

（・・・たいしたものだなあ）

カウスはしみじみと思った。

50人近いメンバーの受けた仕事のスケジュールを把握し、管理しているのは今日の前にいる幼い少女、チャットである。

この年齢にして人事を任されているというのは、いやはや、立派なものだ。

（僕には出来ないな、これ）

そう考えていると、チャットが書類から顔を上げてカウスを見た。

「空いているメンバーと、貴方とのパーティーの相性を考えて、と
りあえず……。」

カノンさん、ロイドさん、エステルさんの三名にお願いしようかと考えたんですが、どうでしょうか？」

カウスは推薦されたメンバーを聞いて、少し考えた後、

「いいよ。それじゃあ、受けてくれるかどうか聞いてくるよ」

そう言つて、機関室を後にした。

- 2 -

「ん、いいぜ、受ける」

そう言いながら、しかしロイドは机の上での作業をやめなかった。
椅子に座って、まるで勉強に真剣に取り組んでいるようにも見える

が、勉強が大嫌いのロイドに限ってそれは無い。

彼は今、何か工作に取り組んでいた。

やけに器用なロイドは、何か・・・アクセサリーのようなモノを作っていた。

「えーと、忙しいならいいんだよ？他の人にも聞いて回るし」

「いや、別に忙しくないって」

そう言っつて、ロイドは椅子から降りた。

ぐつと背伸びをし、部屋の隅に立てかけておいた二刀の剣を手にとる。

「俺にとっつてこつういふのは趣味だからさ。

別に、優先することじゃ無いんだよ」

「趣味・・・かあ」

カウスの呟きに、ロイドは首を傾げた。

「ん？俺の趣味・・・変か？」

「いやいや。ただ、僕はこつういふのあまり無いかもなあつて思つただけだよ」

「へえ。趣味が無い・・・か」

「うん。ところでさ、ロイド。さっきまで何を作つていたの？」

「ああ、あれか？あれはコレットへのプレゼントなんだ」

「へえ・・・」

「こないださ、コレットが外から帰つてきたとき、俺にプレゼントをくれたんだよ。

ソレのお返しだ」

「なるほど」

他愛も無い会話をしながら、別区画の扉の前に立った。
そこには、エステルが住んでいる部屋がある。

「エステルー？いるー？」

扉をノックしながら尋ねる。

「あーはい。今開けますー」

扉が開いて、中からエステルが出てきた。

「はい？何か御用でしょうか？」

「ああ。ちよつと、一緒に依頼を受けてくれるメンバーを探していたんだ」

「依頼です？」

「うん。これ」

そういつて、カウスはエステルに依頼の書かれた書類を渡した。

「……あ、『メディアの涙』。

へえ、珍しいです。これ、色々な病気とかに効く薬として有名なんですよ」

「あ、そうなんだ。

依頼書にも薬の材料として、って書いてあったけど、エステルも知ってたって事は、割と有名な薬草なの？」

カウスの質問に、エステルはすぐには答えなかった。
少し首をかしげて、うーんと唸っている。

「うーん……あんまり有名では無いみたいです。」

これ、良く効くといえそうですが、あくまでエリクシールと同等の役割を果たすという感じなんです。

エリクシールも高価ですけど、手に入らないほどのものでも無いですよ？

だから、あんまり使われていないって、本には書いてありました」

エステル言葉に、少しカウスは疑問を持った。

「ふん・・・そうなんだ。

そんな薬草、護衛を雇ってまでどうして採りに行くんだろう」

「まあ、依頼主の都合なんだろう？

俺たちはあんまり気にしないで、ちゃちゃっと仕事を片付けようぜ？」

ロイドの言葉を聞いて、カウスも別に気にする事ではないと判断し、次はカノンノを探しに行った。

途中の会話。

「それにしても、エステルは物知りだね」

「そんな事無いです！私は本を読んで知識を得ているだけですから・・・」

そういうのを『物知り』というのだと、カウスは思った。

そして、自分はディセンドーの割には物知りには及ばないなあとも思った。

（別に、ディセンドーが物知りであるとは決まっていなくて、そもそも僕は勉強は苦手だけれども）

好奇心はあるが、勉強熱心ではない。

自分の不思議な知識欲に疑問を持ちながらも、カウスは深く考えなかった。

- 3 -

甲板に出る。

この時間、パニールの手伝いを終えたカノンノはいつもここにやって来るはずだからだ。

「あ、いたいた。おい、カノンノー」

カウスは手を振って、カノンノに呼びかける。

「あ、カウス」

カノンノも気付いて、呼んでいた本を閉じた。

「ありゃ、カノンノ。またいつもの本を読んだの？」

「ううん、違うよ？これは別の本。パニールから借りた小説なんだ」

「恋愛モノ？」

「うん！」

そう言ったカノンノは、相変わらずの笑顔を見せていた。

「パニールも絶賛してたんだよ？」

氷のようにつめたい心を持った男の人が、ひよんな形で出会った女性と恋に落ちるって話なんだって」

「へえ。・・・ん？でもさ、氷のように冷たいんなら、そもそも恋なんてしないんじゃない？」

カウスが素朴な疑問を持つ。

カノンノは、それを待ってましたといわんばかりに

「それがこのお話の面白いところなんだって！

そもそも恋愛なんてしないような人を、主人公がどうやって変えていくのか・・・私も楽しみなんだあ」

と言った。

「あゝ・・・って事は、カノンノ、今忙しい？」

カウスは、カノンノはこれから小説を読むのに没頭しようとしていた所だったのかもしれないと思い、仕事に誘うのをよした方がいいかもしれないと考えた。

「ん？そんな事無いよ？」

しかし、カノンノは快く引き受けてくれた。

ありがたい、とカウスは思う。

みんな、自分の趣味の時間を割いて自分の受けた仕事に関わってくれているのだなあと感じたからだ。

「あ、そうだ」

「なあに？」

「カノンノ、『メディアの涙』って、知ってる？」

カウスの質問に、カノンノは

「え？うん。聞いたこと無いなあ」

と答えた。

同じ読書好きでも、千差万別なのだなあとカウスは思った。

「依頼の内容は、その『メディアの涙』を採取する人の護衛だってさ。」

カノンノ、戦いの準備は出来てるのか？」

「大丈夫だよ、ロイド」

「しっかりと準備をして行きましょう。」

依頼主が指定した場所は、今まで私達も行つた事のない土地みたいですし、どんな魔物がいるのかわかりませんから」

それぞれの会話が聞こえる。

カウスも、自分の装備を改めて確認した。

「問題ない・・・オツケー。」

それじゃあ、チャットに準備が出来たって伝えてくるよ」

機関室に行つて、チャットに仕事の準備は出来たと伝える。

「それじゃあ、僕のほうから依頼人に準備が出来たって伝えます。

向こうと打ち合わせしてから出発の日程を決めるんですけど、一応何時でも出かけられるようにして置いてくださいね」

チャットからそう言われ、四人は今日のところは解散しておこうという話になった。

カウスは、特にすることも無いので、カノンノと共に甲板に行く。

「もし良かったら、私が読み終わった本、貸してあげようか？」
カノンノが提案する。

「え？あゝ・・・えゝと・・・絵本か恋愛小説？」

カウスが苦笑交じりに聞き返す。

「うん。あれ？カウス、そういう本は読まない？」

カノンノが残念そうな表情をした。

その表情を見たカウスは、もうちょっとからかいたくなかったが、その気持ちをとどめて

「いやいや。僕、本を読んだことは仕事の上でしかないんだ。

そういう小説を読んだことは無いから、ぜひとも挑戦してみようと思っ

そう宣誓した。

「そうなの？じゃあ、たくさん貸してあげるね！」

カノンノはそう喜んで言った。

カウスは、困ったような表情をして、

「でもさ、男の僕が恋愛小説ばかり読んでるのって、変じゃない？」
そう返す。

「？そうかなあ？」

首をかしげて本気で考え込むカノンノ。

カノンノが悩むということは、それほど変ということも無いのだろう。

アドリビトムのメンバーの様子を見る限り、恋愛小説に詳しい男性なんて全くといって良いほどいない気もするが、案外そうでも無いのかも知れない。

そう。

カウスは、人間として振舞うための最低限の知識以外は、ろくに持

ち合わせてはいないのだ。

故に、趣味や娯楽がどういったものなのか、それを彼は知らない。ディセNDERにとっての喜びは、世界のために戦うという一点のみ。それ以外の幸福など知る必要は無いし、そもそもそんな余分なモノを持たせるのは余計だ。

だが、世界樹はそこまで理詰めで考えなかったらしい。

生み出されたディセNDERは、それなりに世間に順応するための知恵と好奇心を持ち合わせていたのである。

彼は、趣味こそ持たないが、持ち前の好奇心で『趣味を持つ人達』に対して興味を持つ。

それはある意味、非常に人間らしい感情。

だが、ディセNDERという役割からしてみれば余分であることに変わりはないものである。

カウスも、その矛盾は重々承知していた。

（・・・けどまあ。楽しい分には、いいのかな）

そんな事を考えながら、カウスはカノンノから5冊の恋愛小説（かなり分厚い）を手渡された。

（・・・・・・全部女の子が主人公だ）

夕飯を食べた後、部屋に入ってから本を読み始めたカウスの最初の発見だった。

それから、とりあえず5冊の中で一番薄い本（それでも314ページあったが）を手にとり、適度に眠くなるまで読んでみた。

「ふあああ・・・おはよう、カノンノ」

「わわ！どうしたのカウス？眠そう」

「うん・・・眠い」

「昨日は眠れなかったの？なんで？」

なんでも何も無い。

一冊読破してしまいそうになるほど、彼は夜通し小説を読み続けただけのことであった。

彼が己の愚行に気がついたのは、パネルが朝食の準備をし始めた際によく歌う鼻歌が聞こえてきたからである。

つまり、今朝方まで彼は本を読み続けていた。

その後、いくらか睡眠はとらないとダメだろうと思い、1時間ばかり眠った。

だが、1時間で睡眠が足りるはずもなく、かえって余計に眠い気持ちになりながら、彼は朝食の準備が出来たと起こされたのである。

「え、ええと・・・楽しんでくれたのは嬉しいけど、ちゃんと体調管理はしないとダメだよ？」

「うん・・・不覚でした。以後気をつけます」

そう言いながら席に着いたカウスは、朝食を食べ終えた後に部屋に戻って再び眠った。

今度は、お昼ご飯が出来たと起こされる。

その頃にはすっかり眠気も取れて、体調はバツチリだった。

「あ、カウスさん。仕事の段取りが決まりましたよ」

食堂に行ったカウスを、チャットが出迎える。

ロイド、エステル、カノンも集まっていた。

・・・と。

カウスにとって、見慣れない男性がそこにはいた。

男性はカウスに対して背中を向けて椅子に座っている。

椅子に座っているが、それでも迫力のある長身だった。

たぶん、立ち上がったらカウスも見上げるような身長だろう。

ヴェイグと同じくらいの身長に思えた。

黒衣のコートのようなものを羽織っている。

それは、ミントが着ている法衣を黒くしたモノと例えられるような服装。

(・・・法衣。あ、そうか。この人が)

カウスが男の正体に気付いたと同時に、男も立ち上がる。

カウスは初めて男の顔を見た。

この男性こそ、依頼人の神父であった。

厳格な顔つき。

一言で表すならば、それだった。

前髪を真ん中で分けている。それ以外に特徴の長い茶色がかった髪。目つきは鋭く、しかし穏やかな表情をしていた。

見たところ、30後半・・・年齢を重ねたものが纏う、威厳のようなものを持っている人だった。

「はじめまして。今回の依頼を出した、アルベルトです」

神父は握手を求めた。
大きい。

手の平が大きく、その後神父の姿を見たカウスは、やはり体格の大きい神父に対して素直にそう思った。

やはり、ヴェイグと同じ、それより少し大きいくらいだろうか。
170cmほどのカウスからしてみれば、十分に長身である。

「よろしくお願いします。今回護衛を引き受けた、カウスです」

神父の握手に応じる。

「あ、それと、敬語じゃなくていいですよ？僕達、まだ子供ですし」
「そうですか？では、お言葉に甘えて・・・」
いや、安心したよ。この依頼を受けてくれる方がいてくれて、ね」

神父の声は低く、威厳に満ち溢れたものだった。
しかし、決して相手を畏怖させるような調子で会話をしない。
そこが、この神父の人徳であり、魅力の一つなのかもとカウスは思った。

「もう知っているかもしれないけれど、『メディアの涙』は既に薬草としては重要なものではないんだ。エリクシールで十分だし、エリクシールはもう少し安価で手に入るからね。

だけど、『メディアの涙』でしか消せない毒もあるかもしれない。
私は、そういう毒を受けてしまったもののために、『メディアの涙』を使った解毒剤を作っておきたいと思ったのだよ」

神父の言葉に、エステルが納得する。

「そういう事だったんですね。あの、一つ質問してもいいです?」

エステルの言葉に、神父は構いませんよ、と答えた。

「あの、アルベルトさんはどうして、神父さんなのに解毒剤の精製をなさるんです?」

「ああ、それですか。」

ふふ・・・貴方達も不思議に思ったでしょう?

どうして神父が薬草を求めるのかと。

ですが、神父だからこそ、薬草を求める必要があるのですよ」

「んん?神父だからこそ?」

ロイドが疑問を持つ。

「神父は、神の教えを説くものである・・・それが一般的な解釈だね。」

だが、時と場合によっては人々に治療を施すときもある。

私が住んでいた村では、神父はあらゆる治療を施すものでね。

私も、代々受け継がれたその神父の在り方を受け継いで、こうして薬草学を学び、解毒剤やその他の薬を作っているのだよ」

何故かロイドには敬語を使わない神父さんだった。

たぶん、彼はロイドも敬語を気にしない人間なのだと見抜いたのだろうとカウスは思う。

事実、ロイドはそういう人間である。

「人々を助けるため、なんですネ。すごいです!」

カノンノが神父さんに賞賛の言葉をかける。

「それ程でもないよ。単に、これで生計を立てているということもあるからね。」

だが、父から受け継いだ解毒の知識を生かさないのはもったいないとも考えたし……。

そうだな。

薬草学は、私の趣味の一つであるとも言えるかもしれない」

「趣味……ですか」

神父の言葉に、カウスは驚いた。

人々を助けるという仕事なのに、神父はそれを趣味と語る。

「ああ。趣味だね。」

私はあくまでも神父。

道に迷った人々に神の教えを説き、導く役割なのだよ」

そう言つて、神父はチャットの方を見た。

「それでは、到着は明日の午前。それから採取のために3日間彼らに護衛についてもらうということで、いいですか？」

「ええ。それで構いませんよ」

神父はチャットの言葉に頷き、その後再び座り込んだ。

「そうそう。それから、私は明日までこの船に滞在するという話になったのだが、明日まで使用していい部屋は、どこにあるのかな？」

神父が疑問を口にする。
すると、チャットがカウスを見ながら言った。

「カウスさん。アルベルトさんを、ゲストルームに案内してください
ああ、それと、アルベルトさんの荷物をロイドさん、一緒に運んで
ください」

「うん」

「ああ、わかった」

よく見ると、神父の傍には黒い大きめのバッグが置かれていた。
ロイドがそれを持とうとすると、神父さんがそれを遮った。

「構いませんよ。私が好きで持ってきた荷物なんですから」

「いえ、貴方は依頼人であり、お客様です！ちゃんと接客するのも
私達の仕事です！」

チャットの言葉に、神父は小さな笑みを見せた。

チャットのその発言はもつともなのだが、それをチャットが言つと、
例えばケーキ屋さんごつことかで遊んでいる女の子が、一生懸命店
員の真似事をしているように見えなくも無い。

「では、お任せします」

「ああ。それじゃあついてきてくれ、こつちだから」

「ロイド・・・敬語・・・まあ、いいか」

カウスは苦笑しながら、神父さんをゲストルームに案内する。

感じのよさそうな人で、まずは一安心だった。

明日の護衛任務を、しっかりとこなそう。この神父さんのためにも。

カウスは、ゲストルームに案内するまで、そのようなことを考えて

いた。

- 5 -

「今日はここで休んでください。えっと、夕飯が出来上がったままここに來ますから」

カウスとロイドは、そう言って部屋を後にしようとした。

「・・・少し待ってくれないか？君達に、いや・・・君に聞きたいことがあるんだ。

カウス君・・・」

「え？」

部屋を出ようとしたところで、カウスはアルベルト神父に呼び止められた。

ロイドも、呼び止められてはいないのだが、一緒にその場に残った。

「なんですか？」

「一つ、確認したいことがあってね。

いや、他愛も無い冗談だと受け流してくれても構わないし、不機嫌になったのならこちらから謝るから、とりあえず私の質問を聞いて欲しい」

「へ？・・・え、ええ。なんでしょう？」

神父は、うつすらと笑う。

途端に、空気が重くなったようにカウスは感じた。

神父の持つ、威圧感。それとは別の圧力。

神父は、ゆつくりと口を開いた。

「君は……『ディセンドー』かね？」

「……………」

なんとなく。

そう質問される気がしていて、その通りだったから、別段驚きもしなかった。

「どうかな？」

神父が確認するようにカウスに問う。

カウスは迷った。ディセンドーであることを必要以上に話す必要は無いのではないかと。

それは、もしかしたら厄介ごとを持ち込むきっかけになるかもしれないと考えたゆえの迷いであった。

しかし、その迷いの時間に神父は何を悟ったか。

「……そうか。やはり、君がディセンドーだったのだな」

そう、確認するように呟いた。

「ええ？ちよつと待てよ！まだカウスは何も言っていないぜ？」

ロイドが慌ててフォローに入ろうとするが、神父はかぶりを振ってロイドの言葉を止めた。

「いや、実は私は以前、彼を見かけたことがあってね。

その時……君は青い髪、斧を持った男と戦っていたのだが……心当たりは無いかな？」

（バルバトス・・・）

ちゃんと心当たりがあった。

どうやら、神父はバルバトスとカウスの戦いを目撃したことがあるらしい。

その時に、カウスがディセクターと呼ばれていたことを聞いたそうだった。

「となると・・・世界樹の落とし子・・・ディセクター伝説は、真実だったということか」

「現在に伝わっているディセクター伝説が、全部事実を基にしているかどうかはわかりませんけどね」

カウスは観念して、自分がディセクターであることを認めた。
すると、神父は満足したように頷いた。

「そうか。では、明日は安心だな。ディセクターに護衛についても
らえるのだから」

神父は笑みを見せながら言った。

「いや、ディセクターだからって、特別でも何でも無いですよ？」

「それに、カウスだけじゃなくて、俺たちも一緒に行動するからな？
神父さんの護衛は万全だぜ！」

ロイドも、半ばカウスに対抗するように身を乗り出して言った。

「あはは・・・確かに、ロイドがいると心強いね」

「う・・・カウス・・・余裕を見せてるな・・・？」

「ええ！？いやいや、ありのままの本音を言っただけだよ？」

「・・・俺を腕試しで負かしておいて、よく言うよ」

「いや・・・あれからまた随分時間が経ったし・・・ロイドの戦い

を見てると、今の僕じゃあ勝てないかもなあっていつも思われるよ?」

「お?そうか??」

いやー、そう言っただけで貰えたら、なんだか自信が湧いて来るな!」

ロイドとカウスの他愛も無い会話。

「ふふ・・・君達は仲が良いね」

神父の発言で、二人の会話が止まる。

二人とも、すっかり客人を無視して雑談を繰り広げてしまっていた。自分達の浅慮さに呆れながら、カウスとロイドはもう一度神父に向き直る。

「あの・・・どうか、このギルドにディセプターがいるって事、内緒にして貰えませんか?」

僕個人の問題だけじゃないので・・・」

「ああ、もちろん。秘密は守るよ」

神父の言葉に、カウスはひとまず安心した。

この神父は、とりあえず口が軽いようには見えない。

「それじゃあ、夕飯が出来たら、またここに来ます」

「ああ、ありがとう。また後でな・・・ロイド君、カウス君・・・」

部屋を後にする。

「・・・いいのか?ディセプターって事、ばらしちゃって?」

廊下に出てからしばらくして、ロイドがカウスに尋ねた。

「うん．．ばらすも何も、あの神父さんは最初から僕がディセ
ンダーだって、知っていたんじゃないか」

ロイドの問いに、カウスは鼻の頭をかきながら答えた。

両手を頭の後ろに回して、カウスは

「まあ、いいんじゃないかな。別に」

特に気にした風でもなく、そう言った。

「まあ、カウスがいいんなら、俺も構わないけど．．．」
ロイドも、気にせずに歩いた。

- 6 -

少年達は去った。

部屋には、黒衣を纏った神父が一人。

「ディセンダー．．．世界樹の落とし子．．．世界を救うために、
生み出される存在．．．」

何かを確認するように、独り言を呟く。

「さて．．．明日は、どうなることだろうな．．．」

神父は今日、出会った少年少女の顔を思い出す。
だがやはり、一番印象的だったのは、あのディセnderの少年だった。

人間でありながら、人間で無いもの。

生まれたときからある程度の知識を有し、世界を救済する役目を負った存在。

「ああ、違うか・・・いつの間にか世界を救っている存在・・・だったのだろうか」

神父は、頭に人差し指を当てて考え込んだ。

あるいは。

人間では無いのだが、人間であるもの。
生まれたときから道が決まっいて、世界に働きかけるうちに何かを変えている存在。

さて、『彼』はどちらだろうか？

「・・・・・・・・」

そうして神父が考え込んでから、いくらかの時間が過ぎた頃。

「アルベルト神父さん。食事の用意が出来ましたよー」
扉の奥から少女の声が聞こえた。

「ああ、ありがと。今出るよ」

扉を開けた先には、神父が船長から紹介された少女、カノンノとカウスがいた。

「それじゃあ、案内しますね」

二人が先導して艦内を歩く。

途中、廊下で神父は一人の男性と目が会った。

「あ、ユーリ」

「よお」

ユーリと呼ばれた青年は、神父から視線を逸らさずにカウス達に挨拶した。

「へえ。あんたがお客さん？」

「ああ。始めまして。ユーリ君・・・で、いいのかな？」

「おう。ユーリ・ローウェルっていうんだ。」

・・・カウス。ちゃんとお客さんを食堂まで案内しろよ？」

ユーリは手をひらひらとさせながら、そのまま廊下を進んでいった。

「ふむ」

神父は何かを思案するように、口元に手を当てた。

ユーリは神父と目が会っている間、ずっと気だるそうな目つきをしていた。

- 7 -

夜。バンエルティア号の一角で、エステルとユーリは出くわした。ユーリは、キヨロキヨロとあたりを窺った後、エステルに話しかけた。

「エステル。明日の仕事は気をつけろよ」

ユーリの言葉を聞いたエステルが、少し驚いた顔をした後に、ユーリに満面の笑みを見せる。

「え？あ、ありがとうございます。頑張ってきますね！」

エステルのこの言葉に、しかしユーリは頭をかいてうぐんと思えるだけだった。

「……まあ、なんつか。激励の意味で言ったんじゃないんだけどよ」

ぼそりと、呟くようにユーリは言った。

「え……？どういう意味なんです？」

エステルが疑問を抱く。

しかし、ユーリはそれを気にせずに、部屋に帰ろうとした。

「別に……さて、明日は俺も仕事か……どうなることやら」

「ユーリも仕事なんです？頑張ってくださいね！」

「……おう。そんじゃあな」

「はい、おやすみなさいユーリ」

そう言って、二人はそれぞれの部屋に戻っていった。

月が雲に隠れる。

月明かりを失ったこの世界は、暗い。

ネガティブネストが存在していなくても、世界は闇に閉ざされるときはあるのだ。

明日は、雨が降るかもしれない。

）
続
く
）

〈黒い神父と護衛依頼〉（後書き）

続きモノといっても、お話を3つくらいに纏めるつもりですので…。

そうですね、中篇とか、3部作とか、そんなノリだと思ってください。

ただ、私が抱いたひそかな不安について書いておきたいと思います。今回もTOWRM2を使ったのは、単純に私が表現したいモノが表現しやすかったからです。

しかし、そもそもテイルズキャラの土台が少なくなるこのマイソロジー系、いかんせんテイルズキャラとの絡みが減ってしまうんですよね……。

本編での彼らの戦いの日々も、別世界の出来事として処理されますし。

無論、彼、彼女らにも存分に活躍し、衝突しあう姿を想定しているので、たつぷりと悩んでもらう予定ではありますが……さて、どうでしょうか。

もし、何かありましたら、感想欄にて仰ってください。

私自身、ただでさえ読者を選んでしまう私の作品なのに、この作品にいたってはさらに読者を選んでしまうような形に仕上がってしまうかもしれない。

そうだったら

『既にそこには読者はいなかった……ザクリッ』

『おおアラヤシキよ！ふてくされてしまうとは情けない！』

『そんな情けない子に育てた覚えはありません！…』

という展開になるかもしれない。

それは辛いのです。主に私が、ですが。

色々と挑戦してみたいという好奇心に任せていますので、何かありましたらご一報を。

皆様の気が向きましたら、私のお話にお付き合いください。

それでは、失礼します。

くヒドラの森と毒く（前書き）

この作品は『世界樹の落とし子へ く黒い神父と護衛依頼く』の続編です。また、題材がレディアントマイソロジー2のため、デイスンダーとして私のオリジナルなキャラクターが出てきます。ご注意ください。

〜ヒドリの森と毒〜

開幕『ヒドリの森と毒』

『世界は穢れてなどいない。理解したまえ。醜いと罵る者もまた、醜い』

- 1 -

曇り空が広がる。

まだ太陽の出ている時間のはずだが、いやに暗く感じる空だった。

「それじゃあ、行きましようか」

「ああ。よろしく頼む」

カウスの言葉に、神父が頷きながら返事をした。

バンエルティア号は、うつそうと生い茂る密林の傍、エメラルドグリーンに輝く海上に停泊していた。

今日から、この密林の中で探し物をする。

目的の品は『メディアの涙』という薬草。

依頼人であるアルベルト神父が、新しい解毒剤を開発するための材料として手に入れたらしい品である。

「うわあ。この中を探すんですか・・・？」

上陸したカウスの最初の言葉である。

空を飛行するバンエルティア号の甲板から、密林を見下ろしてみたのだが、それなりに広いものだった。

目的の薬草である『メディアの涙』がどれだけ希少性の高いものであり、見つけるのに時間がかかるのかは見当もつかない。

無理も無い。

『メディアの涙』は、薬草ではあるが、見た目は道端で見かける雑草の類と変わらないのである。

目的のアイテムを見つけることに関しては、専門家である神父に頼るほか無かった。

「うむ。最短で今日中、最長で3日後の昼ごろまで。

よろしく頼むよ、みんな・・・」

神父が頭を下げる。

「はい！任せてください！」

カノンノが元気よく言った。

「神父さんは、危なくないように俺たちが囲う形で移動するから、真ん中にいてくれよ」

ロイドは、二刀を抜いて武器のコンディションの最終確認をしながら言う。

「それじゃあ、打ち合わせどおり、ロイド。

ロイドが先頭を歩いて、僕がしんがりを務める。

カノンノとエステルは、神父さんの両脇についてね」

カウスが指示し、皆が神父の周りについた。

クエストが開始される。

5人は、うつそうと生い茂る密林の中に入っていた。

その様子を、甲板の上から眺める男がいた。

黒い長髪をなびかせて密林に入っていた彼らを見届けていたのは、ユーリ・ローウェルである。

「ん？ユーリ、何やってんだ？」

リッド・ハーシエルが先ほどから甲板の上で、何をするでもなく外を眺め続けているユーリに声をかけた。

「ん？・・・ああ、リッドか」

ユーリは、甲板のふちに頼杖をつきながら、リッドを横目で眺める。

「ああ。あいつら、今出かけたのか。

こんな密林を歩き回るなんて、大変そうな仕事だよな」

リッドの言葉に、しかしユーリは返事をしなかった。

「・・・・・・・・」

「ユーリ？」

「なあ、リッド。あのお客さん・・・神父な。何か思わなかったか？」

ユーリは眉をひそめながらリッドに質問した。

「はあ？何かって・・・何をだよ？」

リッドが困った顔をしながらユーリに質問を返す。

「・・・ふう。俺にもわかんねえよ。ただよ・・・」

ただ何となく違和感を感じただけだと、ユーリは言った。

「ん？違和感・・・か。あ、そう言えば・・・」

「ん？」

リッドが何か思い出すように、言った。

「あの神父さん、随分とガタイがいいよな。ファラが言ってたんだけどよ、あの神父さんの足運びって、何か武道を心得ている奴がよくやるやつに似てるんだってよ」

「へえ・・・武道、ねえ。あゝ、確かにそんな感じかもな。違和感か・・・あの神父のたたずまいに違和感を感じてたのかもな」

納得するように、ユーリは指をぱちんと鳴らした。

- 2 -

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

密林に入って1時間が経過した。

その間ずっと彼らは無言で密林の中を進んだ。

いつもなら戦いの方針や料理を誰が担当するかなどの他愛ない雑談

を交えつつクエストをこなしていく彼らだが、今回のように依頼人と直接行動するような場合になると流石に遠慮してしまう。

「ふむ。遠慮することは無いよ。これだけの人数がいるのだ。会話が無いほうが不自然では無いか？」

神父の言葉に、ロイドがあはは、と苦笑いをした。

「いやあ・・・いつもの通りっていうのも、何かまずいかなあって思っただけど」

「えーっと・・・『メディアの涙』って、どのくらい珍しい薬草なんです？」

エステルが神父に質問をする。

「ふむ・・・それほど珍しい薬草というわけでもない。

ただ、比較的森の奥のほう・・・人の手が入りづらいところによく生えているね」

「奥の方・・・かあ」

「ああ。少し時間がかかるかもしれない」

「依頼の期間はちゃんと護衛をしますから、安心して神父さんは薬草を探してください！」

「ああ、ありがとうカノン君」

みんなの会話が続くが、カウスはそれに加わらなかった。

「・・・ふう」

本日何度目かのため息。

カウスはパーティーの一番後ろを歩いていた。

それは、後方からの襲撃・・・もっとも不覚を取りやすい位置からの奇襲に備えてのものである。

「どうかしたかな？カウス君」

神父が尋ねる。

「あ、いえ。大丈夫ですよ」

カウスが少し慌てながら神父に問題ないと告げた。

しかし、神父は無表情のまま、カウスのはるか後方を見つめた。

「ふむ・・・」

「あ、あのー神父さん？」

「後をつけられているな。数は3体・・・いや、4体いるな」

神父がボソツと呟いた。

カウスは驚く。

「・・・すごいですね。・・・4体います？僕には3体までしか確認できませんでした」

「いるな。3体に見せかけているが、木々の上にもう1体いるよ」

「・・・上、ですか？」

後方を常に警戒していた自分でさえ、上から狙われているとは気付かなかった。

神父は先ほどまで後方を警戒しているような素振りを見せなかった。それを、振り返ってカウスに話しかけたタイミングで自分達の後をつけている存在に気付いたのである。

（・・・すごいな、この人）

なんとなく、ただの神父では無いとは思っていたが。

カウスにとって、この神父はますます謎だらけの存在となっていた。

「どうするのカウス？」

カノンノが聞いてくる。

カウスは、少しばかり考えて

「それじゃあ、迎え撃とうか。ロイド、前方に敵は確認できないよね？」

そう言つて、後ろを振り返る。

「ああ。特に気配は感じられないな」

ロイドも足を止める。剣の柄に手をかけて、いつでも抜けるように準備をしておく。

「それじゃあ、挟撃の心配は無いね」

「目的はあくまでも神父さんの護衛だからね。エステル、神父さんの傍にいてあげて」

カノンノがそう言つて、大剣をとりだした。

大剣『セブンスサマー』。ナツツナツツ族の羽から作られたという不思議な剣であり、重さや大きさを自在に変えられる剣である。

「はい。回復は任せてください！」

エステルも剣を抜き、盾を構える。

戦闘の準備は完了する。先ほどから後ろをつけているのが魔物か、あるいはそれ以外の何かはわからないが、これで向こうにもこちらが戦う意志を持っていることが伝わった。

「・・・さて。どうなるかな」

神父が呟いた。

誰にもわからない程度に、うつすらと。

神父自身にもわからないくらいに、小さい笑みを漏らした。

「おっと」

自分達が歩いてきた道のりの両脇・・・木々に囲まれた場所から敵が現れた。

右側から2体。左側から1体。

小型の恐竜のような魔物。二足で走って近付いてくる。

合計3体の「コリウンティス」が現れ、カウスたち目掛けて突進し

てきた。

「一気にいくぞ！」

ロイドが二対の魔剣「マテリアルブレード」を構えてコリウンティス目掛けて走り出した。

「それじゃあ僕も前に入るよ」

カノンノにそう告げて、カウスもロイドの後に続いた。

「わかった！援護は任せて！」

カノンノがそう言っで、詠唱を開始した。

ロイドはコリウンティス2体を相手に、上手く立ち回っていた。ステップを踏んで、2体の噛み付き攻撃や尻尾の攻撃をかわす。

「ふっ！」

かわせない攻撃は、左手の剣で受ける。

我流で鍛え上げたロイドの二刀流は、しかし二刀をそれぞれ攻撃と防御に使い分ける基本的な型をとっていた。

直感的な動きなのだろうが、ロイドは効率よい戦い方を編み出していた。

「そこだ！」

コリウンティスの攻撃後の隙をついたロイドが、コリウンティスの首目掛けて右手の剣を振るった。

1体のコリウンティスを仕留める。

それと同時に、もう一体がロイド目掛けて頭から体当たりをした。

「おっと！」

それを大きくバックステップして回避する。

「上手いな……」

神父が呟く。

「？うまい……です？」

神父の傍で待機しているエステルが、神父の呟きに反応する。

「ああ。上手い。さすがは、アドリビトムのメンバー……と言っ

たところだ」

神父は無表情のまま言う。

その時。エステルと神父が会話をしていた頃。
彼らを木々の上から見張るものがいた。

「たあ！」

ロイドが1体のコミュニケーションティスを倒すのと同時に、カウスも自分が相手にしていたコミュニケーションティスを倒した。

「最後の1体・・・いや、上にもう1体いるんだっけ」

突進してきた3体の内2体は倒した。残る1体のコミュニケーションティスも、ロイドに任せておけば問題ない。

それに、カノンも詠唱を終えて、術を放つタイミングを見計らっているようだった。

カノンとロイドに最後のコミュニケーションティスを任せ、自分は神父とエステルのもとへ合流しようかと考え、二人のいるほうに振り向いたとき。

「あ・・・エステル！真上だ！！」

カウスが叫ぶ。

それは、ありえない光景だった。

・・・二足歩行で地上を走り回るはずの『コミュニケーションティス』が、木々の上から、神父とエステル目掛けて落下していた。
4体目のコミュニケーションティスである。

「！！！」

エステルが剣を構える。

「シギヤー！」

「う・・・！」

しかし、コリユンティスは耐久力の高い魔物である。

エステルは一突きで仕留めようかと考えたが、それは不可能だ。

落下の速度も相まって、魔物がエステルを下敷きにするのは目に見える。

「！！！」

突然の事態に、カノンノも驚いた。

しかし、間に合わない。

今から詠唱を破棄して接近しても、その頃にはコリユンティスは地上に降り立って神父がエステルのどちらかを攻撃しているだろう。

その状況を崩したのは、護衛される身であるはずのアルベルト神父だった。

「――」

地響きを発生させたかと思うほどの威力を持って、神父は大地を踏みつけた。

腰を落とし、腕を折りたたむ。

神父は、落下してくるコリユンティスを見据える。

口を開いたまま、頭から落下してくる敵。

神父は打ち抜く箇所を見定め、そのまま右拳を落ちてくるコリユンティスの額目掛けて放った。

バガンッ！！と、何かがはじけたような音が響いた。

「・・・・・・・・・・は？」

カウスは啞然としたまま、その光景を見た。

カノンノとエステルも、二人とも同じように目を見開き、驚きで硬直している。

コリウンティスが上昇している。

それは、先ほどの事態を見ていたものならばだれもが疑う、冗談じみた光景だった。

本来、自由落下の法則に従い、あらゆる物体は下方へ落下するように動く。

上方に浮上するには、揚力を利用するなどの手段が挙げられるが、今日の前で起こっている出来事はそれらとは全く違う。

下から突き上げる威力。

落下の加速を相殺し、その上で上方に吹き飛ばすほどの衝撃。

その圧倒的な運動エネルギーを、神父は自らの肉体のみで生み出していた。

「・・・・・・・・なんだ、それ」

思わず独り言を呟いたのはカウスだった。

ふわりと浮いたコリウンティスは、再び落下の法則に従ってそのまま地面に叩きつけられ、絶命した。

あるいはそれは、浮いていたときから、絶命していたのかもしれないかった。

八大招・立地通天砲。

アップパーのように拳を下から相手の顎下目掛けて突き上げる一撃である。

相手の顎を砕き、脳を揺らす。場合によっては、相手の頭蓋を粉碎することもあり得る必殺の一撃。

神父はそれを、顎ではなく、頭から落下してきたコリユンティスの額目掛けて放っていた。

「すうー……はぁー……」

ゆっくりと呼吸をし、神父はたたずまいを直し、エステルを見た。

「大丈夫かな？ エステル君」

「え……あ、え？」

「……は、はい！ 大丈夫です」

いつもの丁寧な振る舞いをしようとしていたエステルだったが、驚きは隠せていない。

「終わったぜー」

そんな中、ロイドが戻ってきた。

見れば、後ろからつけていたコリユンティスの最後の1体を仕留めていた。

「あれ！？ こっちにもコリユンティスが！？ だ、大丈夫か神父さん！？」

ロイドは前方で戦っていたため、先ほどの一連の出来事を見ていなかった。

「大丈夫だよ。ロイド君」

神父は小さく笑いながら答える。

「大丈夫ですよね・・・そりゃあ」
カウスも呟いた。

- 3 -

「さて、それでは、何故私達に魔物を仕向けたのか、ご説明願おうか」

「え・・・？」

神父が突然、木々が乱立する奥に向かって呼びかけた。
すると、木々の間から、何かが現れた。

「魔物・・・！？」

カノンノが身構える。

しかし、現れたのは小さな毛むくじやらの物体だった。
さながら、黒い毛糸を、強引に丸めたようなもの。

「・・・毛玉だ」

カウスが素直な感想を口にする。

だが、現れた毛玉に突然、黄色く光る点が二つ現れた。

「・・・目？」

「そうだ人間。私も生物だ」

低くしわがれた声が聞こえた。

「・・・喋れるんです？」

エステルが言った。

「・・・もしかして、森の住人・・・です？」

「我々が人間達にどのように呼ばれているのなんて知らん」

「・・・・・・・・」

「人間。すぐにこの森から出て行け」

森の住人が言った。

「え・・・・どうして？」

「この森は我々の住処だ。勝手に人間が踏み荒らして良い土地ではない」

森の住人の言葉には、人間に対する強い拒絶の意志が表れていた。

「そんな・・・・私達は、この土地を侵略しに来たんじゃないんです！」

カノンノがそう言うが、森の住人は表情を変えなかった。

・・・・毛玉に点のような目がついているだけなので、そもそも表情があるのかも怪しいが。

「帰れ。これ以上踏み込むというのなら、我々はより多くの魔物をお前達に仕向けるぞ」

森の住人の言葉に、カウスが気付いた。

「そっか。コリユンティスが木の上に登る筈が無い。

あなたが魔物たちに指示を出して僕達に襲わせたんですね？」

「そうだ。全てはこの森を人間たちから守るためだ」

「正確に言えば、『この森に住んでいる何か』を守るためでは無いのかな？」

神父の言葉を聞いて、森の住人の様子が変わった。

あからさまな敵意を見せている。

「・・・・なんだと」

「この森に住んでいる何かを守るためでは無いのかと聞いたのだ。

・・・・安心しろ。ここにいる誰もが、その生き物を目当てに来ているわけではない。

私達の目的は『メディアの涙』と呼ばれる薬草だけだ・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうかな。それでも私達を襲うかね？ならば、こちらにも・・・・少なくとも私は手段を選ばぬが」

そう言った神父の声は、やけに冷たいものを含んでいた。

前日までのイメージが変わってしまうかのような、冷徹な言葉。

「貴様。どこで知った」

「知っていたのではない。推測だ。森の住人が人間たちの前に姿を現し、人間に警告を出す・・・という話を聞いたことがあってね。

君が私達の前に姿を見せた・・・その事実が、この森には『何かある』という事柄を教えている」

「・・・貴様」

「無論、このことを口外するつもりは私には無い。彼らにも無いだろう。彼らはギルドの仕事をしているものだが、信頼の置ける人物だ」

「人間など信用できない」

「ああ。それで構わない。だが、私に関わるな。私も目的があつてここに来ているのだ。この命を危険にさらされるといふのなら、全力で障害を排除する」

「・・・」

神父の言葉は本物である。

先ほどから感じる威圧感は尋常では無かった。

「あ、あの・・・神父さん」

「いいだろう」

エステルが神父に何か言おうとしたが、その前に森の住人のほうから言葉が出た。

「この森の、どの程度奥まで踏み入るつもりかは知らんが、我々が決して踏み入ることを許さない『聖域』までは貴様らを見殺ししてやる。」

だが、それ以上踏み入るときは、貴様らに再び警告する」

「ああ。構わん」

「忘れるな。貴様らの行いは、あらゆるものを破壊するためだけにしか機能していないのだと」

「重々承知している」

森の住人が、再び木々の合間を縫うように消えていく。

神父は、森の住人が完全に見えなくなるまでその姿を見届けた。

「・・・今のは」

「この森に住む者だろう。私のような存在を快く思っていないようだな」

カウスの言葉に神父が答える。

それと同時に、彼は再び歩き出した。

「あつと・・・神父さん！先ほどはありがとうございました！」

エステルが神父の横につき、お礼を言う。

神父はその言葉に笑顔と頷きだけで返した。

「・・・ねえ、カノンノ？」

カウスが、傍にいたカノンノに話しかける。

「・・・なに？」

「あの神父さん・・・護衛なんて要らないんじゃない？」

謎の神父の実力を目の当たりにした、素直な感想だった。

「・・・そう・・・かな？」

苦笑いをしながら、カノンノはそう答えた。

- 4 -

「カウス。そろそろ野営の準備をしよう？」

あたりが暗くなる。

夜が近付いてきたのだ。

結局、あれからも探し回り続けたが、目的の『メディアの涙』は見つからなかった。

「ええと・・・まず、キャンプ用の結界をセットして・・・っと」
カウスは座りこんで、小型の機械を地面に置いた。

「よし。結界をセットするよ」

「ああ」

カウスが機械のスイッチを入れる。

すると、ぼんやりとした光が波紋のように広がり、少し広めの円を描いた。

「オッケー。問題なく展開できたよ」

「それじゃあ、夕飯を作りましょう」

「うむ」

広がった光の円の中心で、5人は夕飯作りを開始した。

簡易な夕飯を食べ終え、食後の休憩をする。

「いや・・・見張りを立てなくてもいいなんて、便利な結界だよ・・・本当に」

カウスが感心したように呟く。

すると、カノンノがカウスの横に近寄って、飲み物の入ったカップを渡した。

「はい、コーヒー」

「うん。ありがとう」

カノンノからカップを受け取り、口に運ぶ。
砂糖の入った苦さ抑え目のコーヒーだった。

「神父さん、薬草は見つかりそうです？」

エステルが神父に問いかけた。

「ふむ・・・難しいかもしれないね。」

ただの薬草探しだと私も思っていたが、余計な邪魔も入ったからね」
神父は、困ったような表情をしてそう言った。

「森の住人・・・だっけ？」

随分と偉そうな奴だったよな」

ロイドが文句を言う。

すると、神父は首を横に振った。

「彼らにとつて、この森は住処であり故郷だ。何よりも優先して守るべきものなのだろう。」

確かにこの場合、侵入者は私のほうだ」

神父はため息混じりにそう言う。

「侵入者だなんて・・・でも神父さんは解毒剤を作るために・・・」
エステルが神父のフォローしようとするが、神父は手を上げてそれを止めた。

「彼らにとつて、そのようなことはどうでも良いのだよ。」

大事なのは、人間の侵入を可能な限り防ぐこと。

人間は様々な自然から資源を奪って生活しているのは事実だからね。
森の住人からしてみれば、人間は全てを奪い去っていく敵なのだよ」
「・・・・・・・・」

「けれど仕方の無いことだ。犠牲があるから発展もある。」

我々に出来る事は、犠牲を最小限に抑えること。それでも生まれる犠牲に、感謝と謝罪の祈りを捧げることだけだ」

神父は目をつぶりながら呟いた。

「犠牲・・・ですか」

カウスが神父に確認するように尋ねる。

神父も、カウスの顔を見る。

「ああ。例えば、食えるという行為ひとつとってもそうだろう。
生きるためには他者を犠牲にしなくてはならない。
それは覆せない真理で、仕方の無いことだ」

「・・・・・・・・そうかもしれませんね」

カウスが答えた。

生きるということは、必ず何かを犠牲にしなくてはならない。

「だが、私の場合は違う。」

解毒剤の精製が目的だが、そんなもの、生きるために決して必要なものというわけでもあるまい。私にとっては研究目的でもあるからね。

・・・まさに、ただの趣味というものだな」

「そんなことないです！神父さんの研究は、毒に苦しむ人を救える、立派なものじゃないですか！」

カノンノが、神父の言葉に反論する。

生きるために必要ではないという言葉が、カノンノにとっては嫌だったらしい。

「そう思ってもらえるだけでもありがたいものだ。ありがとう、カノンノ君」

そう言つて、神父は小さく笑った。

「それじゃあ、もう寝ようか」

カウスがそう言い、寝袋を広げる。

「そうだな。ふああ・・・ねみい」

「うん。それじゃあ、また明日、頑張ろうね」

「はい。皆さんお休みなさい・・・」

「ああ。良い夢を・・・」

皆一様に、自分が眠るための寝袋に入る。

一日中歩き回った疲れもあってか、みんな寝入るまでにそう時間はかからなかった。

「・・・・・・・・」

眠りの底から意識が浮上した。
何か動いた気がしたからだ。

「・・・・・・・・」

だが、それも束の間の出来事。
意識はまた、眠りの底に落ちていった。

— ■ —

- 5 -

目蓋の奥のほうに日の光を感じ、カウスは目を覚ました。

「うーん・・・」

眠い。

そう思っ、カウスは他の者が起きてくるまではもう少し寝袋にくるまっていようと考えた。

だが。

「カノンノ・・・大丈夫です？」

エステルの声が聞こえて、カウスは先に起きている人がいるということを理解して、寝袋から出ようとした。

そこで、カノンノに何か起こったことを段々と把握していく。

「・・・ん？カノンノ・・・どうかしたの？」

寝ぼけたままの調子でそう言った。

見れば、体を半分起こしたカノンノが、エステルと何か会話をして

いる。

「あ・・・カウス・・・おはよう・・・」
元気の無いカノンノの声。

「・・・！カノンノ！？どうしたのさ！
真っ青じゃないか！？」

そこでようやくカウスはカノンノの異変に気付いた。
顔色がとてつもなく悪い。

唇も青紫色に変色している。

それは、高熱にうなされる病人の顔だった。

「大丈夫、だよ・・・なんだろう？起きたらちよつと・・・気分が悪くて」

「いや、ちよつとなんてもんじゃないよ！
と、とにかく、まずは安静にして・・・」

カウスはカノンノを心配して近くに行こうとする。
寝袋に入っただまま。

「うべっ！」

いつもどおりに立ち上がろうとして、寝袋のまま立ち上がれるはずも無く、カウスは顔から地面に転んだ。

「いつつ・・・」

あっ！カノンノ！だから起きない方がいいって！

カウスが寝袋から出ようとしていると、カノンノも起き上がろうと
していた。

「カノンノさん！とりあえず寝ていてください！

私が治療術をかけますから、それで落ち着いたら起きてください！」
起き上がるうとするカノンノをエステルが止める。

「うん・・・ごめんねエステル」

「いいです！とりあえず・・・まずはファーストエイドを・・・」

「いや。その必要は無いかもしれない」

「え？」

エステルがカノンノに治癒術をかけようとしたその時。

いつの間にか起きていたアルベルト神父が、彼女達の傍まで寄っていった。

「・・・カノンノ君。意識はしっかりしているね？」

「・・・はい」

「手を出して。脈を計る」

「・・・えっと・・・お願いします」

「・・・」

神父さんがカノンノの手首に手を当てて、何か呟きつつ脈を計る。

「・・・ふむ。どこか痛む箇所は無いか？」

「えっと・・・全体的に間接が痛いんですけど・・・」

「いや、そうじゃない。針で刺されたようなチクリと痛む感じだ。どうだ？」

「・・・首のあたりに、そんな感じの痛みが・・・」

「エステル君。彼女の首の裏を見てくれ」

「は・・・はい！」

手際よく、神父はカノンノの容態を調べていく。

「あ！神父さん。カノンノの首の裏に、何か小さな腫れ物みたいなのが・・・」

エステルが何か発見した。

と同時に、神父は険しい顔つきに変わった。

「なるほど・・・毒をやられたかもしれん。」

カノンノ君。首の裏の腫れ物は、何かに刺されたことによって出来たものだろう。

何か、心当たりは無いかね？」

「・・・いえ、特に。昨日の戦いでも・・・そういう傷は負った覚えがありません」

「・・・という事は、寝ている間に刺されたのかもしれない」

神父はそう言って立ち上がり、神父の黒いバッグから何かを取り出した。

小さな錠剤。

薬草をすり潰して固形物として固めた薬だろうか。

神父はそれをカノンノに渡す。

「とりあえず応急処置だが、これを飲みたまえ。

少しは楽になるだろう。その後、一度君達の船に引き返すでしょう」神父の言葉にカノンノは申し訳なさそうな顔をした。

「そんな、悪いですよ・・・神父さんの依頼を達成しないと・・・」その言葉に、神父は小さな笑みを作り、

「私は神に仕える身だよ？苦しんでいる人を・・・それも善良なる人を無碍にする様なことはしないし、出来んよ」
そう優しい声で言った。

「・・・ありがとうございます」

カノンノはそう言って神父から渡された薬を飲む。

「しばらく横になっているといい」

「・・・はい。みんな、ごめんね？」

「何言ってるのさ・・・カノンノは悪くない。運が悪かったただけなんだから」

「そうです！もっと自分の体を大事にしてくださいね？カノンノ・・・」

「ありがと・・・」

会話が途切れ、カノンノが目を閉じた。

どうやら、再び眠ったようだ。

しかし、寝息というにはあまりに苦しそうな呼吸が、カウスに焦りと不安を与える。

「うつゝん・・・あれ・・・」

ロイドの声が聞こえた。

カウスが振り返ると、寝袋からロイドが寝ぼけ眼のまま見ていた。

「ロイド・・・今起きたの？」

「・・・よ、よお」

ロイドは照れ笑いを見せながら起き上がった。
カノンノ以外の全員が目を覚ました。

「神父さん？本当にいいんです？依頼を途中で・・・」

エステルが神父に尋ねる。

しかし、神父は黙ったまま動かない。

カノンノの顔を見たまま、何かを思案するようにしている。

「神父さん？」

カウスがたずねる。すると、神父は振り返り、カウスを見た。

その表情は、無表情だった。

無言で、カウスを見続ける。

「・・・神父、さん？」

己のうちに沸いた不安を紛らわすために、もう一度神父にたずねた。

「・・・」

神父がゆつくりと、口を開く。

重い圧迫感。

襲ってくる不吉なイメージ。

「カノンノ君の命は、あと1週間ほどだ」

死刑宣告。

神父の口からは、あまりに非情な事実が告げられた。

「・・・は？」

呆然としたまま、カウスは神父を見上げる。

神父は、目を閉じたまま言葉を続ける。

「彼女が受けた毒は特別なものだ。」

即効性はないが、通常的手段で除去できるものではない。
治療で体の抵抗を強めても無駄だ」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

「彼女が受けた毒は『ヒドラの毒』と呼ばれるものだ。
『ヒドラの毒』を体内に持った虫が何かに刺されてしまったのだろ
う。」

彼女は今、その毒に蝕まれている」

「・・・・・・・・」

「『ヒドラの毒』を現状で解毒する方法は一つしかない。
すなわち、ヒドラの体液から作られる解毒剤を使用することだけだ。
私は残念ながら持っていない。君達は所有しているかね？」

神父の問いに、しかし三人は答えられない。
現状を理解できていないのだ。

「答えたまえ。彼女を見殺しにすることになるぞ」
あくまで無表情のまま、神父はもう一度問う。
「ないと思う。そんなアイテム、少なくとも俺は聞いたこと無い」
最初に質問に答えたのは、以外にもロイドだった。

「エステルはどうだ？聞いたことあるか？」
ロイドはエステルにも質問する。
彼には、こういった緊急の場面で、ギリギリ冷静な思考を保つ能力
があった。

怒ることはあれ、自分を見失うことは無い。

ロイドの思考能力は今、どうやってカノンノを救うか、その手段を見つけるために動いていた。

「え・・・えつと、名前は聞いたことがあります。

けど、そんな貴重なもの、私達のギルドは持っていないと思います・・・」

「僕も聞いたことが無い。たぶん、誰も持っていないと思う」
カウスも答える。

（ロイドに感謝しないとな・・・）

冷静な思考を保持し続けてくれたロイドのおかげで、カウスも驚きからの放心状態から脱出できた。

今できることを整理して、確実に遂行していく。
カノンノを救うために、できることを。

「そうか。ならば、賭けるしか無いな」
神父が言った。

その言葉に、カウスたちは首を傾げる。

「『ヒドラの毒』に『ヒドラの解毒剤』。

これらは、名の通りヒドラという魔物から採取できる成分から作られている」

「あ・・・何かの本で読んだことがあります。ヒドラは強い毒を持つと同時に、薬を作る材料としても優れている・・・。

だから一時期、ヒドラの体は高いお金で取引されるようになり・・・。

そのままヒドラの乱獲が始まったことがあると、そう本に書いてありました」

「その通り。とりわけヒドラの解毒剤は大した金額で取引された。1体のヒドラから少量しか取れない貴重な成分から作られていたからね。

それもあるって、今じゃヒドラは絶滅寸前の生き物らしい」

神父はそう語り、カウスたちから視線を外し、森の奥を見た。

「この森に、その『ヒドラ』がいるかもしれない」

遠くを見たまま、険しい目つきのまま。

神父は独り言のようにそう言った。

「この森に、ヒドラが・・・！？」

「ありえない話ではないよ。昨日、森の住人と出会っただろう？

あれは多分、ヒドラの存在を人間に知られないために行動しているのだろう」

「それじゃあ・・・そのヒドラを見つけられれば、カノンノを助けられるんですね！？」

カウスが神父に確認する。

「ああ。上手く行けばね」

神父が答える。

ロイドはその言葉を聞いて、カウスのほうを振り向いた。

「よし！それなら、早くヒドラを探しに行こうぜ！」

「あ、あの！待ってください！」

ロイドが出発の準備をしようとした矢先、エステルがそれを止めた。

「なんだよ？エステル」

「あ・・・あの！ヒドラを探すって事は、つまり」

その先を言いくそうにするエステル。

しかし、神父がその言葉を引き継いだ。

「ああ。つまり。ヒドラを『殺す』ということだ」

「・・・」

その言葉に、黙り込んでしまうエステル。

「そ・・・それは、確かに酷いことかもしれないけどよ・・・」

森の住人を説得して、ヒドラを生かしたまま『ヒドラの解毒剤』をもらうことは出来ないのかよ？」

「無理だ」

断言する神父。

「解毒剤の材料となる成分は、ヒドラの生命活動にとって重要な部分からでないと採取できない。どの道、ヒドラを殺さなくて手に入らない」

無表情で、淡々と話す神父。

「……辛いけど、ヒドラを倒さないといけないのか」

「ですが……それは……」

「どうしたの……エステル？」

先ほどからエステルの様子がおかしい。

カウスがそれに気付き、エステルにたずねた。

「……えっと……あの」

言いにくそうにするエステル。

そこへ、先ほどと同じように神父がエステルの言葉を引き継いだ。

「ヒドラを殺すということは、つまりこの『森』そのものを殺すということだ」

当たり前のように、神父は言った。

「はあ？なんでそうなるんだよ？」

ロイドが驚きながらそう言った。

「自然の摂理の一つだ。」

ヒドラがいなくなった森は、今まで例外なく生態系を崩していった死ぬとまでは言わないが、正しい形では無くなっていく。

単純な話だ。ヒドラが持つ影響力とは、それほどまでに大きいということだ」

「……だから、森の住人は私達の侵入を拒むんです……」

「そう。この森を守るために……な」

神父とエステルの言葉から、カウスは現状を整理する。

カノンノが受けた毒は、ヒドラを殺さなくては解毒できない。

ヒドラが死ねば、この森は生態系を崩して、本来の形では無くなる。森の住人はそれを阻止するために、人間の侵入を拒んでいる。

つまり、自分達の住処を守るために。

このまま放置すれば、カノンノは……………。

「……………」

そこまで考えて、カウスは急に吐き気がこみ上げてくるのを感じた。
なぜ？

単純な話だ。

これは、『奪い合い』。

自分達の目的のために、他者の大事なものを奪うという行為。
例えば食事と同じである。

しかし、普段から意識せずとも行っている行為であるにも関わらず、
今回は気持ちが悪いのは何故なのか。

「カウス……………どうした？」

ロイドがカウスの様子に気付き、心配する。

「……………うん。大丈夫」

カウスはそう返事をする。

「何が大丈夫なのかね」

しかし、その言葉を神父が否定した。

「……………え？」

「これからどうするのか。それを決めなくてはならないのでは無い
のかな？」

神父の言葉に、カウスは再び気分が悪くなるのを感じた。

「どうするって……………ヒドラを探すんじゃないのかよ？」

ロイドが当然のように返すが、それを他の者は素直に受け入れない。

「ロイド……………この森を、殺すかもしれないんですよ？」

「……………けど、このままだとカノンノは……………」

「はい……………一体、どうすれば……………」

「……………」

二人の話し合いは終わらない。

エステルもロイドも、カノンノを助けたいと思う気持ちは同じだ。だが、この森を殺すということについて、エステルは不安を覚えている。

ロイドも、カノンノを助けると決めておいて、実は悩んでいるのかもしれない。

（……僕は？）

カウスは、自分がどうすればいいのかをまだ決めていないことに気付く。

（……カノンノ）

眠りながらも、呼吸は苦しそうな彼女を見る。

助ければいい。

本当に？

森を殺す。

それがもたらす被害は、一体どれほどのものなのか。

ヒドラ1体がなくなることですまれる被害が……果たしてカノン1人の命と天秤にかけて良いのか。

『ディセクターは世界を救う存在である』

世界を救うとは、一体なんだ。

この場合、どっちが正解なんだ。

「……僕は、は」

何を言おうと思ったのか。

カウスはカノンノの苦しそうな顔を見たまま思案する。

思案するまでも無い。

仲間の苦しんでいる姿なんて、見たくない。

—— だから君は森を殺すのか？

—— 『傲慢』だな。

自分の内側から響いてくる声を殺して。

カウスは、ロイドたちのほうに振り返った。

「カノンノを助ける。ヒドラを・・・殺す」

現時点での気持ちを口にした。

罪深い選択であるのかもしれないと、カウスは考える。

だが、このままカノンノを見捨てるなんて選択も、まっぴらだった。

「・・・そうか。では、出発しようか」

神父が言った。

その表情は、さきほどの無表情から一転して険しいものに変わっていた。

森の奥を目指して、歩き出す・・・。

くヒドラの森と毒（後書き）

設定のパクリが酷いことに気がついたアラヤシキです。

この話はあるゲームのストーリーの一部分を参考に書いています。というわけで、ご存知の方は「あ、あのゲームからパクってる」と気付きつつ、生暖かい目で見下してください（汗）

テイルズに触れる前の私が、シナリオという要素に初めて引き込まれたゲームです。

本気で物語りに心動かされた中学生の春でした……。

その後、はじめて触れたテイルズがシンフォニアだったのです。

いや、若かりしころはそういう話に純粹に一喜一憂して……今じゃどうしてここまで歪んだのか。

話がそれてしまいました（汗）

神父さんが放った技とかは、素人知識で知っていた技を流用しただけです。

真剣に格闘技を学んでいる方、ごめんなさい。

ゲームとかに使われがちなメジャーどころの技を使ってみたと思います。つたのです。

私の好きな感じの話として構築していきますので、かなり読み辛い話になってしまうかもしれませんが、どうかご容赦を。

次で一応の締めを。その次に補足的な話を投稿するという形で、合計4話で構成しています。

もしよろしかつたら、感想をどうぞ。

読んでいただきありがとうございます！

それでは、失礼します。

くディセンダーと代価く（前書き）

この作品は『世界樹の落とし子へ くヒドラの森と毒く』の続編です。また、題材がレディアントマイソロジー2のため、ディセンダーとして私のオリジナルなキャラクターが出てきます。ご注意ください。

「ディセクターと代価」

結果『ディセクターと代価』

『生きるということは、弱者を踏みつけて先に進むことだろう』

- 1 -

天候は悪く、昼間だと言うのに薄暗い森の中を、彼らは歩き続けた。一度バンエルティア号に引き返して、カノンノを休ませるべきかとも考えた彼らだが、

「いや。時間が惜しい。君達の船には応援の要請だけ連絡して、私達は探索を開始するべきだろう」

そう神父に言われ、カウスたちは探索を始めた。
この森にとって大事な命である、ヒドラを倒し、自分達の大切な仲間を救うために。

「・・・・・・・・」

カウスは先ほどから一言も発しないまま歩く。
その背中に、毒に苦しむ少女を背負ったまま。
「・・・・・・・・」

無言で、とにかく歩くことしか考えられなかった。
ヒドラに会って、本当に戦うことが出来るのか。

戦わなくてはならない。

カノンノを助けるためにも。

しかし、その考えに行くと、急に気持ちが悪くなる。

（・・・・要するに。『慣れていない』んだな、僕は）

戦いを挑む立場。

奪い合い。

相手に痛みを与える行為。

そういったものからは、程遠い場所で戦っていたのが今までのカウスだったのだろう。

マナの恵みを守るといつてテロ活動を行っていたナディとも、結局は和解する形に持っていけた。

それはつまり。

ナディの掲げる意義という者が『所詮その程度のモノ』でしかなかっただけの話。

今回は違う。

森の住人は、確実にカウスを殺しに来る。

それは、自分達の故郷を守るために。

ひいては、人間たちの略奪行為をこれ以上見逃さないために。

カウスは、今まで金儲けのためだけにヒドラを殺してきた人間に苛立ちを覚えた。

そういったものたちの身勝手な欲望を満たした結果、ヒドラは絶滅寸前にまで追い詰められたのだ。

そうして、本当にヒドラの解毒薬を欲する今の自分達のような人間には、そのしわ寄せがやってくる。

(・・・何考えてるんだ)

そこまで考えて、カウスは己の身勝手な考えに蓋をした。

そんなものは所詮、結果論ではない。

ヒドラの命を必要とした人々が、かつてどれほどいたのか知らないが、それらだつて需要があつたから供給されただけのこと。

そして、ヒドラを必要としている今の自分に、そういった人たちを罵倒する権利は無い。

「カウス・・・大丈夫か？」

ロイドがカウスに声をかける。

彼も、先ほどから口を開いてはいなかったが、仲間の様子が尋常では無いことに気がついて声をかけたのだ。

「大丈夫だよ」

不安を悟られないように、カウスはいつもどおりの調子で言った。

「疲れたなら代われよ？カノンノを背負うんだったら、別に俺でもいいんだからよ」

そう言つて再び、ロイドは前を向いて歩き出す。

「・・・ああ。大丈夫。ありがとう」

呟いて、カウスは自分が今背負っている少女の様子を伺った。

（・・・納得、いけないよな）

彼女が一体、何をしたというのか。

こんな苦しみを、彼女が抱える理由がわからない。

いや、理由がわからないと言えば、どうして毒が体内に入ってしまったのかを追求していない。

（結果は敷いた筈だ・・・間違いなく）

昨夜の晩を思い出す。

魔物避けの結果は、ちゃんと自分達が野営をしていた一体を囲うように起動したはずだった。

実際、今朝起きあがった時も、その結果は残っていたのだから。

しかし、カノンノは何かに刺されてしまい、それが結果的に毒を受けるきっかけとなってしまった。

「あのさ、エステル・・・」

「はい？」

カウスがエステルに近付いて、質問をする。

「魔物避けの・・・キャンプ用の結果ってさ。」

魔物以外の生き物には意味ないの？

例えば、その・・・小型の虫とか」

「・・・わかりません。」

確かに、結果は魔物を近付かせない効果がありますけど・・・虫までは防いでくれるのかどうか・・・」

エステルが難しい顔をしながら言う。

「だよねえ・・・うーん」

カウスも納得して、そのまま進んだ。

「……………」

神父もまた、一言も発しないまま歩く。

その顔は、出発のときの険しい表情から一転して、また無表情になっていた。

- 2 -

「お、カウス！」

「やーっと見つけたぜ」

後方から声が聞こえ、カウスたち全員が振り返った。

見れば、そこにはユーリとルーク、それにリッドとファラがいた。

「みんな！」

エステルが笑顔になり、皆を迎えた。

「よお」

「無事に合流できたね」

そう言つて、ファラはカウスが背負っているカノンノに近寄っている。

「カノンノ・・・大丈夫？」

「・・・とりあえず、今のところは」

カウスが答えた。

今のところが大丈夫でも、未来がどうなるかの宣告はされている。

1 週間。

あまりに唐突過ぎるリミットの設定。

実を言うと、カウスは今でもこれが現実であると受け止め切れていない。

昨日まで元気だった少女が、今この瞬間毒によって苦しんでいる。昨日と今日、過去と現在にあまりに大きな断絶があるように感じた。きつと、他の者達もそうなのだろうと、カウスは思う。

合流した仲間達はみんな、カノンノの苦しむ姿を見て表情を曇らせた。

まるで、嘘だと思いたいという気持ちだが、現実を前にして折られてしまったように。

「お前たちから連絡があつたときは本気で驚いたよ・・・」

ルークはそう言って、神父の方を向いた。

「あんたがカノンノの助ける手伝いをしてくれてるんだってな。

ありがとう。依頼を諦めてまでカノンノを助けようとしてくれて・・・」

「・・・・・・」

ルークの言葉に、しかし神父は反応しなかった。

無表情。

いや、むしろ何かを考え込むようにして。

「・・・・・・あのー」

「ん？」

ルークが困ってしまい、もう一度声をかけた。

そこでようやく神父は反応する。

「ああ・・・問題ないよ。私はこれでも聖職者なのだ。

人助けも仕事のうちであるし、それに・・・」

「それに？」

「私の依頼につき合わせてしまったばかりに、カノンノ君は毒に倒れたのだ。

・・・責任は私にある」

「ええ！？・・・そんな事は」

無いとルークが言おうとして、ファラが遮った。

「そんな事ないです！

密林に入る前の夜、カノンノはあなたのことを立派な人だと言っていました！

そのあなたが、そうやって自分を責めたら・・・カノンノもきつと苦しみます」

「・・・・・・・・」

ファラの言葉に神父は、

「ありがとう、お嬢さん」

そう言つて小さな笑みを見せて頷いた。

「しかし・・・ハロルドの作った、人工の伝書バト・・・か。

使う機会なんてそうそう無いと思つてたけどよ。

こういうときに便利なんだな」

言いながら、ユーリは懷から銀色の物体を取り出した。

鳥の形を模したそれは、ハロルドが最近になつて作り出した機械である。

手紙をくりつけ、飛ばすことによつて、離れた場所にいる者たちに連絡をする事が出来る。

まさに人の手で作られた、機械の伝書バトだ。

「飛び方が不気味極まりないものだったけどね・・・」

「違いねえ・・・」

苦笑交じりに返したカウスに、ユーリも小さく笑いながら手紙をくりつけ、その伝書バトを飛ばした。

鳥の頭の部分から3枚の羽が出てくる。

その羽はまるで扇風機のごとく回り始め、

「・・・・・・・・行つたな」

バババと空気を切る音を響かせながら。

ヘリコプターのように、人工伝書バトは空を飛んでいった。

「……………鳥の形してる意味あんのか？」
リッドがぼそりと呟いた。

- 3 -

「さて、合流できたことは向こうに伝えだし、俺とファラはこれからカノンノを連れて戻るよ」

リッドがそう言っ、カウスの方を向く。

「カウス……あまり、無理するなよ？」

「……うん」

カウスはそう返すが、覇気が無い。

それを見たリッドは、やれやれと頭をかいた。

「リッド？」

「あのさ……俺、ギルドをやる前は獵師をやってたからよ……
こういうのって、慣れてるって言い方も変なんだけど、わかる気は
すんだよ」

「え？」

「生きるために、なんだよな。仕方の無いことってわかってても、
苦しいんだ。

多分、恨まれる。俺も、今まで何度か……獲物が俺を恨んでいる
んじゃないかって思いながら、とどめを刺したことがある」

「……ああ」

「そういう時の、気の紛らわし方だ」

リッドはそう言っ、眼を瞑る。

「何も食わずに、全ての生き物を生かしてやって、自分はそのまま
死んでいく……」

もう誰とも会えない。誰とも会話できない。もしかしたら、俺の周

りの人間は、俺がそうやって死んだことに対して悲しむかもしれないし、怒るかもしれない。

「・・・そういうのって、嫌だなって思えるか？」

「・・・」

「俺は嫌だよ。だから、俺は生きる」

「・・・ああ」

「死ぬまでは、生きる。そういう行動は、誰にも咎める権利は無いと思うぜ」

「・・・」

「・・・はあ。まあ、いきなり過ぎるもんな。そういうのって、やっぱりキツイよなあ」

そう言つて、リッドは眠っているカノンノを背負うためにかがんだ。アラがカノンノをリッドに背負わせる手伝いをする。

「なあ。神父さん。あんたは、どう思っているんだ？」

「ん？」

リッドは神父の方に顔を向けない。

カノンノを背負いながら、神父に問いかけた。

「今回の出来事。『森』を殺すって話。

あんたは・・・カノンノを助けるために協力してくれているけど、あんたはそれでいいのか？」

「・・・」

神父は目を瞑った。

「さて、それでいいとは・・・どういう意味かな？」

「神父さんは、カノンノを救うために森を殺す罪を背負うことになつてもいいのかって意味だよ」

「・・・」

神父は小さく笑った——ような気がした。

「確かに・・・私はこの場合、どちらかの味方になるのは不自然かも知れんな。

自らの目的達成のために行動するか、徹底して傍観者であり続ける

か。

「・・・だが、先ほども述べたとおり、今回の出来事は私が原因でもある。」

この森をもつと危険な場所だと認識していれば、彼女をこんな目に合わせることは無かつただろう」

「だから、せめてもの罪滅ぼしにカノンノを助けるってか？」

今まで会話に入ってこなかったユーリが言った。

「ああ。それとも、原因である私は一刻も早くここから立ち去るべきかな？」

「・・・いや、純粹に手伝ってくれる奴がいるのは嬉しいんだよ。」

ありがとな、神父さん」

「・・・」

また、無表情。

神父は小さく頷いた。

「リッド。早く戻ろう。カノンノを休ませてあげないと・・・」

ファラがカノンノの苦しそうな顔を見て、急ぐように提案する。

「ああ。それじゃ、また後でな・・・みんな。」

リッドとファラが立ち去る。

カノンノをリッドが背負って、二人はバンエルティア号へ向かう。

去り際まで、彼女は眠ったままだったが。

もし今回の選択を——まだカウスは選びきれていないが——彼女が知ったら、なんと言うのだろうか。

『私は生きたい！』

と、言い切るだろうか。

『私のために、森を殺すなんてしちゃダメだよ』
と、皆を心配しながら言うだろうか。

どちらも、カノンノが言いそうだし。

どちらも、カノンノらしくない台詞であった。

少なくとも、カウスにはそうとしか思えなかった。

「う・・・」

また吐き気。

カウスは、こみ上げる吐き気を必死になって抑えた。

「しっかりしろよ、カウス」

ユーリがそう言っ、カウスの右肩をポンッと叩いた。

「うん・・・大丈夫だよ、ユーリ」

そう答えたカウスの顔を見て、ユーリは小さく笑って歩き出した。

カウスが歩き出そうとしたとき、今度はルークが傍に寄ってきた。

「辛かったら辛いって言えよ、カウス」

そう言っ、ルークはカウスの左肩をポンッと叩いた。

「ああ・・・大丈夫だよ、ルーク」

そう答えたカウスの顔を見て、ルークは心配そうな顔をして歩き出した。

「・・・」

カウスも歩き出す。

カノンノが離脱し、ユーリとルークを加えた6人のパーティで、森の奥を目指して歩き出す。

聖域とは、古来より神々が住まう地であり、人間が踏み入ることを許されない場所である。

それは、人間が聖域に踏み入ることで災いが起こるからでもあり、聖域が穢れるからという理由だけでもある。

選ばれた者は聖域に踏み入ることを許されるが、それ以外の大多数の人間は踏み入ってはならないという場合もあるだろう。

そう。

人間が足を踏み入れれば、聖域は穢れるのだ。

すなわち、人間が神々から見て穢れているということ。

過ちを繰り返す生き物。神の創造物にして、神を越えようと試みるもの。

神に達しようとする事さえ罪深いというのに、自らを神に近い存在にしようと足掻く者。

神は、それを許さない。愛する事こそあれ、許しはしないのだ。

なぜだ？

人間が神に愛されているのならば。

聖域に踏み入ることすら許されるのではないか。

神が人間を愛しているのならば。

聖域を穢すような汚れを人間に与えはしないのではないか。

そもそも。

汚れているのならば、なぜ存在する必要があるのか。

案外、君達は全然、これっぽっちも穢れてなんていないんじゃないかな？

踏み荒らせ。

人間ならば、踏み荒らせ。

聖域などこの世には無い。

己の存在を認めるならば、踏破できぬ地など創り出すな。

お前は人間だ。

ならば、人間にしか出来ないことをやり尽くせ。

その姿もまた、美しいのだから。

- ■ -

- 4 -

「……………止まれ、人間共」

「！！！」

森の中を歩き始めて3時間。

うつそうと生い茂る木々の中から、声が聞こえた。

「森の住人…………」

エステルがそう呟く。

「ここから先は、昨日私の同胞が警告した通り、我らの聖域だ。貴様ら人間を通ることは許さぬ」

黒い毛玉が茂みの中から現れた。

1体が出てきた後、2つの同じような毛玉が現れる。

計3体の森の住人が、カウスたちの前に立ちはだかった。

「・・・・・・・・」

神父は何も語らない。

昨日あれだけ聖域には踏み入らないと自分から宣言しておきながら、今こうして聖域に踏み入ろうとしている。

そこに負い目を感じているのか。昨日のような威圧的な態度を森の住人に向けることは無い。

代わりに、ユーリが森の住人達の前に立った。

「昨日は俺たちの仲間になっちゃいかいを出してくれただってな。

・・・まあ、そのことはいい。

悪いけどよ。あんた達の聖域とやりに『何が』いるのか・・・教えてもらっていいか？」

「・・・・・・・・人間。貴様、それがどういう意味か知って言っているのか？」

「・・・・・・・・」

ユーリは答えない。

ただ、彼のたたずまいから感じられる雰囲気は確かなものだった。ここを押し通る。

言葉にせずとも、その意志だけははっきりと伝わる。

「・・・・・・・・ふざけるな。人間」

森の住人が、怒りに震えながら言葉を発した。

「ふざけるな！ふざけるな！！」

貴様らはどれだけ多くの我が同胞を殺せば気が済むというのだ！！」

「・・・・・・・・」

「この森に何がいるかだと！？」

ふざけるな！！欲に走った愚かな者どもよ！！

貴様らの世界の仕組みのために、我々の世界を滅ぼすというのか！

「！」

「・・・・・・・・」

「何がいようと関係ない！貴様らはやはり生かしておけん。ここで、殺してやる」

「・・・・・・・・・・はあ」

森の住人の激昂を真正面から受け止め、ユーリはただため息を漏らすだけだった。

「悪いけどよ、こつちだって退けねえんだ。仲間が死にかけてんだよ。」

助けるためには、ヒドラが必要なんだよ・・・・」

「なに・・・・？」

森の住人の怒りが鎮まる。

そこへ、ルークが説得を試みる。

「あ、あのよ！仲間が『ヒドラの毒』にやられて死に掛けているんだ！

『ヒドラの解毒剤』が無いと、俺たちは大切な仲間を見殺しにしちまう！

頼む！ヒドラに会わせてくれ！

仲間を助きたいんだ！！」

純粋な心の叫び。

ルークもまた、仲間が死ぬのを放って置くことは出来ない。

かといって、他者から大切なものを奪うことも良しとは出来なかった。

それゆえの説得。お互いが納得して先に進むための交渉。

「貴様らの事情など知らん。勝手なことをほざく人間」

「・・・・・・・・え」

だが、一切の交渉の余地無く。

その説得は無駄に終わった。

「なるほど。貴様ら人間は同族に甘い。同族を救うために、人間以外の生き物の世界を殺すなど、過去に何度も繰り返してきたな。

良からう。ならばこちらにも、全力で貴様らを排除するまでだ」

3体の森の住人が、素早い挙動でカウスたちの上方、伸びた木の枝

の上に飛び移る。

同時に、地響きが起こる。

「なんだ!？」

「これは・・・!」

突然、彼らの近くで地割れが起こった。

地割れが起こった地面が膨らみ、その下から巨大な魔物が現れる。

「・・・ロックワーム!!」

体を堅い岩で固めた、巨大な蛇のような魔物がそこにいた。

「殺せ」

森の住人の言葉を聞いて、まるで操られているかのようにロックワームはカウスたち目掛けて突進した。

「うわっ!」

その突進を、全員は横に飛んで避ける。

「っ!!くらえ——蒼破あ!!」

ユーリの刀から飛ばされる蒼い閃光。

ロックワームにあたるが、魔物はそれを気にせずに暴れまわる。

「くそ!堅えな、おい!」

「なら・・・!!」

ルークが走りよる。

地面から露出している体をあちこちに振り回し、今のロックワームには近付くことは出来ない。

「エステル、カウス!術を頼む!」

「はい!」

「・・・うん!」

ルークがそう叫んで、暴れるロックワームの前に踊り出た。

「来い!!お前の相手は・・・この俺だ!!」

そうルークが言うと、ロックワームは暴れるのを止めて、ルークのほうに向き直る。

（・・・よし、来い!）

暴れまわる巨大な魔物を仕留めるために、前衛が囷になって時間を稼いで、後衛が術で援護するという、定石通りの戦いだ。

「惑わされるな。術使いを狙え」

しかし、森の住人がそう言った途端、ロックワームは体の向きを急に变えて、エステル目掛けて突進した。

「っ！?——エステル!!」

ユーリがエステルの元へと駆ける。

「ぐっ——!!」

「きゃっ——!?!」

そのままの勢いで彼女を抱きかかえるようにして跳ぶ。

「ガアアアアアアアア!!」

ロックワームは、エステルが先ほどまでいた場所をその巨体で踏み潰していた。

「あ、ありがとうございますユーリ」

「礼は言い!それより、次が来るぞ!」

立ち上がり、体勢を立て直すユーリとエステル。

しかし、ロックワームはすぐ傍に居るユーリたちには目もくれず、向きを変える。

その先には、エステルと同時に詠唱を開始していたカウスがいた。

「カウス、気をつけろ!!こっちに来るぞ!!」

「っ!?!?・・・くそ!!」

ロイドの叫び声を聞いて、カウスは詠唱をやめる。

そのまま腰にさげていた剣を鞘から引き抜いて、接近戦にそなえた。

魔法剣士。

剣士としても戦うことができ、術使いとして立ち回ることも出来る。回復技こそ持たないものの、あらゆる戦闘に柔軟に対応できる上級職である。

「魔神剣!!」

「魔神剣・双牙!!」

カウスとロイドが同時に叫ぶ。

地を這う3つの衝撃波。

それらがロックワームの体にことごとく当たる。

「ガアアア!!」

意に介さず、突進してくる。

「くっ!!」

右方向へ横っ飛びをするカウス。

ロイドも、カウスとは逆側へと跳んで避けた。

「くそ・・・やり辛いな・・・」

「ちっ。魔物の癖に、狙ったように術の詠唱してるやつを攻撃してきやがって」

ユーリが舌打ちをしながら言った。

「事実、狙っているのだろっ」

すると、カウスの後ろから神父の声が聞こえた。

神父は、とある一本の木の前に立っていた。

右拳を軽く突き出して、木の幹に当てている。

「神父さん・・・!? 狙っているってどういう・・・!!」

傍に居たルークが質問を言い切る前に、神父は行動に出た。

「その高さからなら、落ちても死なぬだろう。」

瞬間。バキッと、生木を叩き割るような音が聞こえた。

神父は動いていない。拳を動かしてすらない。

だというのに、神父の前の木は大きく振動している。

「ぐ、ぬお!？」

そして、神父の傍に森の住人が落ちてきた。

神父が手を当てていた木は、先ほどロックワームを呼び出した森の住人たちが上っていた木であった。

いや、手を当てていたのではない。

神父は『殴った』のである。高さが10メートル以上ある立派な木を、1発の拳で大きく揺らすほどの威力を持つて。

見れば、木の幹には、神父が手を当てていた部分だけヒビが入っていた。

寸勁。

優れた拳法家とは、その体全てが爆発的な威力を発生するための動力炉として機能する。とりわけ、下半身が占める比重は大きい。

相手を『殴る』という行為において、大事なものは上半身よりも下半身である。

つまり下半身が衝撃を生み出すための役割を果たしている以上、上半身で生み出されるエネルギーは無視しても十分な破壊力を生むことが出来る。

拳を相手に突き出すまでの距離など無用。自分の突き出した拳が相手の体に当たるまでの空間、その間に生まれる加速度など、それほど重要ではない。

相手に拳を密着させたままでも、十分相手の内臓を破壊するだけの威力を持った『パンチ』を打つことが出来る。

「・・・・・・・・眠れ」

そのまま神父は森の住人に近寄り、その体に手刀をあてた。

「ぬ・・・・・・・・おの、れ・・・」

森の住人は途端に動かなくなった。
黒い毛玉が一つ、地面に転がった。

一瞬のうちに、神父は森の住人を気絶させた。

「あと2体か・・・」

そう言って神父は上を見つめる。

3体いた森の住人の内、1体しか落ちてこなかったからだ。
残りは他の木の上に移っている。

「神父さん!!あの木だ!!」

神父が何をやるうとしていいのか察したルークは、神父から見て右手のほうに生えている一本の木を指差した。

「なるほど、あそこか・・・」

踏み込む神父。そのまま2本目の木にも寸勁を当て、同じように上から落ちてきた森の住人を気絶させた。

「ぬうつ!!おのれえ!!」

最後に残った森の住人が、地上に降り立って逃走を開始した。
聖域と呼ばれた方向に消えていく。

「ガアアア!!」

ロックワームは相変わらずに暴れていた。

今度はロイド目掛けて突進する。

しかし。

「エステル、カウス!!今度こそ術を当ててやれ!!」

ユーリの号令と共に、二人は詠唱を開始した。

森の住人という司令塔を失い、ロックワームは本来の行動原理に従わざるを得なくなる。

途端に、動きが単調になるロックワーム。

この魔物には、今は近くににいるものを排除するという考え以外無い。
「よつと!!」

突進を難なくかわし、すぐに体勢を整えるロイド。
すぐにロックワームの傍に走りよる。

「吹っ飛べえ!!獅子戦吼!!」

ロックワームに、獅子を模した闘気が激突する。
ふらりと体勢を崩すロックワーム。

その隙を逃すことなく。

「ホーリーランス!!」

「サンダーブレード!!」

詠唱を終えた二人の術が炸裂した。

「……………ここまでして、人間を拒むんですね」

「……………ああ」

黒焦げになったロックワームの亡骸を前にして、エステルとルークが呟く。

「けど……俺たちだって、大切な仲間を救いたいんだ」

そんな二人に、ロイドが声をかけた。

その言葉はまるで……自分に言い聞かせるように。

三人から離れた場所では、カウスと神父、そしてユーリが集まっていた。

「……………なあ、神父さん。あんた、何者だ？」

「……………」

「さっきの……木を揺らしていたやつ。あれ、なんだ？
普通の神父なら、あんな事できねえだろ」

「ユ、ユーリ……」

ユーリが神父に向かって問いかける。

神父は無表情のまま、ユーリを見る。

「ならば、私は普通の神父では無いのだろうな」

淡々と、神父は言った。

その言葉には、何の感情も込められていない。

不気味すぎるくらいに、何もこもっていない言葉だった。

「……………は？」

「急ごう。森の住人が何か策を用意してくるかもしれない」
そう言って、神父は歩き出す。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

いつの間にか、神父は先頭を切って歩き出す。
まるで、早めに事を終わらせたいかのように。

- 5 -

彼らの目の前には。

一体の魔物が崇められていた。

「・・・・・・」

聖域と呼ばれていた場所には、湖があった。

緑色に輝く、不思議な湖。

その中心に、ソレはいた。

「・・・・・・ヒドラ？」

カウスが呟いた。

「ああ。ヒドラだ」

神父が答える。

どうやら、本当にこの森にいた者は・・・森の住人達が必死になつて守ろうとしていた者はヒドラだったらしい。

湖の中心にいるモノは、黄色い甲殻を纏った巨大な蛇の様であった。
先ほどの戦ったロックワームよりも、一回り大きい。
赤く輝く眼が異様に威圧的だ。

「ギイ・・・・」

聞こえてくるヒドラの鳴き声。
そこには、確かに命が存在した。

「う．．．．．」

カウスは、再び吐き気を感じた。
視界の焦点が定まらない。

ここにきて。

己の弱さに腹がたった。

足が前に進まない。

あれを殺すことが出来ない。

あれを殺せば何がどうなるのか。

わからないからこそ殺せない。

「はあ．．．はあ．．．」

懸命に吐き気を堪え、前を見る。

「人間。ここまで来た以上、何が何でも貴様らには死んでもらわなければならなかった」

森の住人が、どこからともなく声をかけた。

「人間。もはや無意味な問答であろうが、貴様らに問う。

ヒドラは森の神だ。ヒドラが死ねば、この森は死ぬ。

この森が死ねば、住処を失った我々は何処かへと旅立たねばならぬ。
そうして我々は住む場所を失っていき、狭い土地で生きるために争わなくてはならない。

わかるか？貴様らの行いによって、どれだけの命が苦しむことになるのか。

それでも．．．」

「．．．．．」

「それでも貴様らは森を殺すか！？」

それでも貴様らはヒドラを殺すか！？」

この流血によって、貴様らの私腹は肥やされるかも知れんが、それに一体何の価値がある！？

貴様らの行いで、何千何万という森に生きる者が死ぬのだぞ！？

それでも・・・奪うのかっ！！？」

「・・・・・・・・」

森の住人の言葉には、明確な殺意、怒り、憎しみが込められている。

長い歴史の中で、失われていった彼らの土地。

住処を追われ、新たな土地に辿り着いても、侵略者としてしか扱われることの無い者達。

原因は彼らには無いのに。

彼らは被害を受け続けた。

人間の力が強大になればなるほど、彼らは自分達が段々と小さく狭くなっていくのを感じた。

彼らの歴史は、人間に対する怨嗟の歴史でもある。

大地と共に生き、大地と共に死ぬ。

そういう生き方を尊び、全うしようとする彼らにとって、人間はただ異端でしか無い。

彼らにとっては、人間だけなのだ。

釣り合いの取れない選択をする命。

誰がどう見ても、割に合わない行動をとる命。

十の命を生かすために一を犠牲にするというのならば、まだ道理は通る。

だが、人間は、時として一を救うために十を犠牲にすることも出来る。

それは、常に多く、常に新しいものたちを生かそうとする生命の掟を覆す行いだ。

「人間。貴様らは言ったな。仲間を救いたいと。ならば、我らの土地を侵略することは出来ぬはずだ。

他人の存在を受け入れているのならば、何故、人間以外の生命の存在を受け入れられない？

お前たちが他人を救うために、他のものを犠牲にするというのならば。

我々は、自分達を守るために、身勝手なお前たち人間を退けるまでだ」

湖の周りを、囲うように黒い物体が埋め尽くす。

今まで隠れていたらしい大勢の森の住人達が、一斉にこの場に現れたのだ。

「ギイ・・・ギイイ」

ヒドラが、呻く様に鳴きながら、立ち上がる。

体を起こしたヒドラは、全長10メートルはある巨体だった。

「ヒドラの怒りを・・・この森の怒りを知れ。世界に住んでおきながら、世界を殺す異端共！

生命として存在することすら汚らわしい者達に、世界樹の裁きを下してやる！！」

森の住人達が、一斉に怨嗟の声を上げる。

世界樹の裁きを・・・と何度も叫ぶ。

『世界樹の裁きを！！』

浴びせられる怨嗟の声。

ぶつけられる憎しみの意志。

投げつけられる悲しみの慟哭。

『世界樹の裁きを！！』

カウスはいよいよ、呼吸が定まらないほどに苦しくなってきた。ロイドも、何かを言い返そうと口を開いているが、何も言うことが出来ないでいた。

エステルは、ただ目を瞑ってその怨嗟の声を受けた。

『世界樹の裁きを！！』

他の者たちも、どんな顔をしているのかカウスにはわからない。ただきつと。

みんな、ままならない事態に苦しんでいるのではないかと、そう思った。

『世界樹の裁きを！！』

そんな中で。

「・・・・・・・・く」

誰かが小さく笑った。

「ヒドラよ！！裁きを！！」

「ギィ・・・ギシャアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ヒドラが空中に飛び上がり、そのままカウスたち目掛けて落下してくる。

「!!」

カウス達とはつさに飛びのく。

ヒドラは陸地に着地し、カウスたちを見下ろした。

ヒドラの着地によってカウス達の陣形は分断される。

6人はヒドラの周囲を囲うように移動した。

ヒドラは動かず、ただカウスの姿だけを見ていた。

その赤い眼が、何かを訴えているように見える。

「あ……く……」

剣を力強く握れない。

先ほどから聞こえてくる恨みの声が、カウスの戦意を削いでいく。

「死ぬぞ、カウス」

後ろからそうぼそりと言われた。

「ユーリ……ああ。ごめん、わかってる」

「いいじゃねえか。あちらさんもやる気満々なんだ。

……これで、正当防衛成立だ」

そついうユーリの顔も、明らかに苦悶に歪んでいる。

根が純粹なお人好しである彼は、この事態に苛立ちを覚えているのだろう。

「正当防衛になるかはわからないけどよ……命狙われてんだ。

……戦わなくちゃ……手段を選んでなんかいられないだろ……」

今度はルークが、カウスに声をかける。

カウスの傍にいる二人の剣士が、彼を支えようとする。

「………うん」

鞘から剣を抜く。

カウスの戦意が伝わったのか、ヒドラも赤い眼をさらにぎらつかせ、

「ギシャアアア!!」

カウスたち目掛けて突撃してきた。

「ち！」

ヒドラの体は大きい。

その上、先ほどのロックワームが比べ物にならないほどに動きが早い。

避けられないと判断し、カウスたちは防御に入る。

「くー！」

防御した姿勢ごと弾かれる。

カウスは吹き飛ばされ、辺りに生えていた木の幹に背中から激突した。

「がつ！」

カウスは、そのまま崩れ落ちた。

「や・・・野郎ー！」

「く・・・！！！」

ヒドラの突進によって同じように吹き飛ばされていたユーリとルークが、体勢を立て直し、ヒドラに向かって同時に走り出す。

「ルークお坊ちゃんよ！覚悟があるなら俺に続きな！」

まるで挑発するように、ユーリはルークに指示を出す。

「はあ！？なーに言ってるんだよ！」

・・・いいぜ。しくじんなよ、ユーリー！」

そう言うと同時にルークは跳躍する。

それに先んじて、ユーリはさらに速度を上げてヒドラに接近していた。

「幻狼斬ー！」

素早い速度で、ヒドラの背後に回りこむよう移動しながら切り付ける。

しかし、ヒドラの固い甲殻に刃は通らず、あまりダメージを与えることは出来なかった。

「ふっ！」

後ろに回りこんだ異物を攻撃するために、ヒドラは蛇のような細長

い体を捻り、ユーリを見る。

「たああ!!」

そこへ、先ほど跳躍していたルークが現れた。

「くらいやがれ!!」

叩きつけるように、剣を振り下ろす。

落下の速度も相まって、かなりの威力を持った一撃。

それをヒドラの頭部に叩き付けた。

ガキンという反響音が響く。

ヒドラの甲殻は、ルークのその一撃さえも防いだ。

「が!いつてえええ!!」

振りぬくつもりでいた一撃を弾かれ、逆にルークは反動を受けてしまった。

そのままヒドラの背中側に落下する。

「おいおい・・・冗談だろ!？」

ルークの攻撃など意にも介さず、狙いはユーリに定めたまま。

ヒドラの口が開く。

そこから、紅蓮の炎が飛び出した。

「くっ!? あっつ——!!」

炎がユーリを包む。

あまりに意表をついた攻撃に、ユーリは一瞬ひるんでしまった。

「ユーリ!!」

「!——しまっ」

ヒドラが体を回転させる。

勢いよく、尻尾をユーリに叩き付ける。

「ぐ、ふ——!？」

飛ばされ、そのまま地面に転がるユーリ。

「ユーリっ!!」

エステルがユーリの元へと駆け寄る。

それをヒドラは赤い眼で睨む。

次の標的はエステルだと、そう告げるかのように。

「どこ見てんだ？次の相手は俺だ！！」

しかし、そうして標的を定めていたヒドラの目の前に突然、ロイドが現れた。

「飛天翔駆！！」

上空に飛び上がった状態から、剣を突き出して勢いよく突進する。狙いはヒドラの頭。

しかし、そこはルークが攻撃して歯が立たなかった箇所では無いのか。

「ダメだ！！ロイド！！」

ルークが叫ぶ。

しかし、ロイドはそのまま攻撃した。

「どうだ！！」

ロイドの剣の切っ先が、ヒドラの赤い眼を向いていた。

どれだけ外皮が硬いものでも、必ず弱い部分はあるはずである。まず、あの赤い眼を狙ってみるとというのがロイドの狙いだった。

ガン！

金属の衝突音。

「ち・・・なんて奴だよ」

ヒドラはロイドの攻撃が届くすれすれで目を閉じていた。

そして、どうやら目蓋も他の部位と同様、硬い外皮で出来ているらしい。

「くそ・・・どこを攻撃すりゃぁいいんだ」

地面に着地した後、すぐにバックステップで大きく距離をとるロイド。

「——！カウス！」

そこでロイドは、カウスを見る。

先ほど木に叩きつけられてからすぐに体を起こしたカウスは、そのまま術の詠唱を始めていた。

「雷雲よ・・・我が刃となりて・・・」

サンダーブレードの詠唱。

ヒドラ目掛けて、その術を放つ準備を、カウスは終えていた。

物理攻撃では歯が立たない。

だったら、術による攻撃が効くかもしれない。

とにかく、あらゆる攻撃手段を試してみる必要がある。

まずは弱点を見つける。未知なる敵と戦う時のセオリーである。

「サンダーブレード!!」

雷の剣がヒドラ目掛けて落ちる。

「ギシャアアアア!!」

叫ぶヒドラ。

果たしてダメージが通っているのかどうか、それはわからない。
しかし、ヒドラの動きはまるで苦しんでいるようにも見える。

(・・・チャンスか!?)

ルークが走る。

苦しみもだえるヒドラに追い討ちをかけられれば、あるいはこの戦いをここで終わらせられる。

「避けるルーク!!」

「!!」

ユーリの声が聞こえ、ルークはとつさに剣を防御のために構えた。
ヒドラの尻尾が、先ほどユーリを吹き飛ばしたようにルークにも迫る。

「があっ!!」

防御して、かろうじてヒドラの一撃の威力を殺す。

しかし、相殺しきれず、ルークはそのまま飛ばされてしまった。

「効いていない!?!」

カウスも驚く。

ヒドラは苦しんでいるように見えたが、あれはフェイクだったのか。

「いや。効果はあったようだ」

いつの間にか、カウスの傍に神父が寄ってきていた。

神父はカウスの傍で、まるで観測者であるように事態を見続けた。

「見たまえ。ヒドラの外皮が一部剥けている。」

硬い外皮に守られている生き物は、中身が柔らかいのが相場だ。

完全に外皮を破壊すれば、ヒドラに剣を刺すことができるのでは無
いかな？」

「！！」

神父の言葉に、全員が息を呑む。

倒すための道筋が見えた。

あとはそれを実行するのみ。

ユーリが立ち上がるうとする。

しかし、

「ぐっ！？っ——！」

彼は脇を抑えて、その場に座り込んだ。

「ユーリ！？どこか痛めたんです！？」

「ちくしょ・・・！アバラを折られたかもしれない・・・」

動けないユーリ。

そこへ、ヒドラが再びユーリ目掛けて突進する。

今度こそ、ユーリとエステルを踏み潰すために。

「まずいつ！！」

ロイドがユーリの傍による。

「させるかっ！！」

ルークも、ロイドの隣に並び、ヒドラを迎え撃つ姿勢をとる。

「無駄だ人間！！怒れるヒドラを倒すことなど、貴様らには出来ん
！！」

森の住人の声が響く。

ヒドラは、そのまま4人を吹き飛ばそうと体ごとぶつかりに行った。

「烈破掌！！」

「獅子戦吼！！」

ヒドラの突進を少しでも止めようと、ルークとロイドは技を放つ。しかし、それは小さな抵抗でしかなく、巨大なヒドラの蹂躞を止めることは出来なかった。

「みんな!!」

飛ばされる4人。

地面に倒れこみ、動かない。

「ぐっ……」

倒れこんだが、それでも立ち上がろうとするルーク。見れば、他の者達も立ち上がるうとしていた。

「さらばだ、人間。汚らわしき存在に生まれた自分の存在を呪うのだな」

森の住人が静かに、厳かに、死刑宣告を告げる。

ヒドラもそれに呼応するかのように、動けない4人に止めを刺そうと動き出し……。

「図に乗るな。清く正しき者達よ——」

ヒドラの体の傍に、黒い人型が居た。

「世界樹の裁きだと？笑わせてくれる——」

その人型は、右拳をヒドラの体に当てる。

「そんな都合の良いものが・・・貴様らのような者の味方をするものか。」

彼らのような者を相手にするものか――」

神父の声には、妙な感情が入り込んでいる。

怒り。

神父の声には、ただ純粹に、何かに対して振り下ろしよつゝの無い、どこに向かえば良いのかわからない、そんな――悲しい怒りが込められていた。

「裁きなど・・・所詮自らの行いを正当化するためだけに用いられる言い訳に過ぎん。」

そう。真に裁かれるべき存在という者を・・・お前たちは、理解していない」

一際大きな炸裂音が響いた。

「な・・・」

「ギシャアアアア!!」

ヒドラが倒れる。

もともと、サンダーブレードの効果によって弱っていた外皮に対して、神父が『寸勁』を決めたため、ヒドラの体に直接ダメージがいったのだ。

「神父さんっ!!」

体勢を崩すという絶好の好機を逃すはずも無く、神父はそのままヒドラの頭よりやや下・・・首の部分に蹴りを入れる。

左足で蹴り上げる。

一瞬の後に右足で蹴り上げる。

連環腿。

左右の足での蹴り上げ。

素早い踏み込みから繰り出される連続蹴りは、相手の体に立て続けにダメージを与え、内部を破壊する。

下手をすれば、顎を蹴り上げられ、粉碎される。

ヒドラの首の甲殻が壊れて無くなった。

ヒドラの命を奪う絶好のチャンス。

「ギシャアアアアアアアア！！！」

「ぬっ！？」

ヒドラが尻尾を神父目掛けて振る。

神父は、その尻尾に対して自ら体をぶつけて、威力を相殺した。

「ディセンダー！！！」

神父が叫ぶ。

「こいつは死に体だ！！私が奴の動きを止めているうちに、倒せ！！」

神父は、ヒドラの尻尾を押さえつけながら言った。

今こそ好機であると。

その手で、『森を殺せ』と――。

ドクンと、心臓が跳ねる。

冷や汗が止まらない。

眼球が痺れる。

胸が痛い。

気持ち悪い。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ちわるい、キモチワル

↑

「・・・・・・・・」

さっきまでは、戦いに集中していたから気にならなかったが・・・。

『世界樹の裁きを!!』

恨みの声は、今でも続いている。

正直に言えば。

森の住人なんて存在、今まで知らなかったし、彼らがどういった歴史を積み上げてきて人間に対して憎悪の念しか抱かなくなっただのかはわからないけど。

『世界樹の裁きを!!』

だけど、一つだけ確かなことはある。

彼らもきつと、世界が大好きなんだろう。

大好きだから、守りたいから、人間の勝手を許せないんだ。

『世界樹の裁きを!!』

ああ、なんて皮肉。

先ほども、自分達に向けられている怨嗟の合唱。
人間という存在に対する恨みの言葉。

だけど、その言葉を向けるべき相手が間違っていた。
だって。

『世界樹の裁きを!!』

その言葉を向けられているのは、他ならぬ『世界樹の落とし子』なのだから――。

「……………ごめんなさい」

謝罪の言葉を、口にする。

そして、剣を握った。

構えて、ヒドラの首――外皮が無くなり、柔らかい体がむき出しになった部分――目掛けて疾走する。

森の住人達が、一斉にカウスに向かって飛び掛る。

だが、間に合わない。

カウスの速度は、彼らよりも圧倒的に速かった。

――ザクリ。

あっさりと。

ヒドラの体に剣は食い込んだ。

「……………あ」

ヒドラは動かない。

誰も動かない。

自分さえ、動こうとしても、動けない。

「……………ああ」

時間が流れていない。
静寂が耳にうるさい。

ヒドラを■してからどれだけの時間が経過したのか。
1分か1時間か、それとも1秒か。

「あぁあぁあ」

なんだっ
ていい。

もり。

どちらに転んでも、悲しただけだ。

[illegible]

地鳴りが起こるほどの絶叫。

湖の周りを囲っていて、カウスに飛びかかろうとした森の住人達。

彼らが叫んだ。全員で叫んだ。

嘆きの言葉を。

怒りの言葉を。

憎しみの言葉を。

恨みの言葉を。

—

カウスにとってそれは、もうどうでも良いことだった。

償えない罪。あがなう事の出来ない罰。

それを前にして・・・それでもディセプターである自分に・・・ただただ悲しいだけだったからだ。

空気の振動は止まない。

全ての生き物が、カウスを殺そうとしている。

そう錯覚してもおかしくないほどに、この場は呪いの言霊で埋もれていた。

「ぬ・・・？」

誰か呟いた。

神父だった。

ヒドラの亡骸を前にして、座り込んで何か作業をしている。

「・・・そうだ・・・解毒剤」

かすれた声で、カウスは当初の目的を呟いた。

大切な仲間を助けるための行動だった。その使命を忘れかけていた。

「待て・・・いや・・・まさか」

神父は、カウスが近付いてくるのを止めようとする。

「馬鹿な・・・このような、ことが・・・」

「神父・・・さん・・・？」

「・・・」

振り返る神父。

——その顔には、明らかに『怒り』の表情が浮かんでいた。

「・・・神父・・・さん？どうかしたんですか？」

「・・・く、何たる児戯だ。く、ふふふ」

「・・・」

「あるいは・・・これこそが・・・ふふ。くだらないな。実に、くだらない」

不気味に笑う神父。

意味不明な独り言を呟いているその姿は、何か愉快なことでもあったように見える。

しかし、この神父は今、間違いなく『怒って』いる。

何に對して？

カウスには、それは解らなかった。

「ヒドラの子供が、体内にいる」

「・・・・・・・・え？」

あまりに唐突な神父の言葉に、カウスも、仲間達も、呪いの言葉を投げ続けていた森の住人達も黙り込んだ。
現状を把握することが、誰も出来ずにいた。

「手を貸してくれ、カウス君。ヒドラの子供を外に出す」

「え・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

「上手くいけば、この森は死なずに済むかもしれん。
急げ。このままでは誕生することも出来ずに死ぬぞ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・君は、『森』を殺すのか？」

「・・・・・・・・！」

「森の住人。聞こえたか。ヒドラの子供がいる。
助けてくれ。ヒドラの子供と、この森の命を」

神父の言葉に、森の住人達は一斉にヒドラの亡骸のそばに集まった。

「・・・・・・・・」

その光景を、カウスたちは呆然と眺めることしか出来なかった。

「・・・・・・・・」

帰りの道中、誰も口を開かなかった。

あの後、ヒドラの亡骸の中には5体のヒドラの子供がいることがわかり、森の住人達はそれこそ死に物狂いでその子供たちを助けようと動いた。無論、カウス達もその手伝いをした。

そして。

ヒドラの子供は全員、無事に外の世界に出て来る事が出来た。

ヒドラの子供が5体。

1体のヒドラから生まれた大切な命達がこの森の未来を守るのだと、そう言われた気がして、カウスは気が抜けたのかその場に座り込んでしまった。

カウス達が殺したヒドラから、解毒剤の材料を手に入れた。
目的を果たした以上、長居することは出来ない。

森の住人に今度こそ殺されてしまいかもしれないからだ。

カウス達が聖域から立ち去ろうとしたとき。

「人間・・・二度と、我々に関わるな」

森の住人達はカウス達にそう言った。

たとえヒドラの子供が生まれて、森は死なぬとわかった所で、ヒドラをカウスが殺したという事実は変わらない。

今回の一件で、彼らはさらに人間達に対して嫌悪を抱いただろう。

しかし、神父はその言葉に反論した。

「二度と関わるな、か・・・それは無理な相談だ。

私達もお前たちも・・・共にこの大地に生きる『命』であることに

変わりはないのだから」

神父がそう言うと、森の住人は心底不服であるといった顔を見せて、そのまま森の中へ消えて行った。

- 7 -

森の中を抜けて、バンエルティア号に辿りつく。

そのころには、すっかり夜が更けていた。

「ああ、カウスさん!!」

「うわっ！パ、パニールさん!？」

バンエルティア号に帰った途端、パニールがカウスの眼前に突然現れた。

「カノンノが！カノンノが!!」

「わ、わかってますよパニールさん！

今、カノンノを助けるための解毒剤を作るところなんです!」

「ああ！解毒剤が手に入ったんですか！

よかった・・・よかったあ・・・」

涙を流すパニール。

その姿を見て、カウスもようやく自分が何を成したのかを理解できた。

（・・・そうだ。この選択は、間違いなんかじゃない）

救えるかもしれない命を、救うための選択。

それが間違っているなんて、カウスには思えなかった。

「では、解毒剤の精製を行わなくては。

どこか、そういう作業するのに適した部屋は無いかね?」

神父の言葉を聞いたカウス達は、急いで神父を科学室へ案内した。

「・・・・・・・・」

バンエルティア号は、空を飛んでいる。

先ほどまでいた森は、彼方の景色へと遠ざかっていった。

「・・・・・・・・」

夜風が冷たい。

こんな時間に甲板に出ている者などいないが、今しばらくカウスはここに居たかった。

「カウス。こんな所にいたのかよ」

後ろから呼びかけられる。

そこには、ルークがいた。

「ルーク・・・どうしたのさ、こんな所に来て」

「その台詞をお前が言うのは滅茶苦茶おかしい気がするけどな・・・」

「

そう言いながら、ルークはカウスの傍まで歩いてきた。

「カノンノの様子、だいぶ落ち着いたってよ。」

まだ目が覚めるまで時間がかかるらしいけど、早くて明日か明後日には目を覚ますってさ」

「そっか。・・・って、カノンノは神父さんから貰った薬で寝てたんじゃないの？」

「ああ。けど、毒が回ってたからか、ずっと眠ってたんだってよ。」

その間は・・・本当に苦しそうだったらしいぜ」

「・・・・・・・・そうなんだ」

「ああ。助かって本当に良かったよ」

「・・・・・・・・うん」

「・・・・・・・・」

黙り込む。

仲間を助けたのだから、喜ぶべきところなのに、素直に喜べない。

「お前ってさ、本当に損な性分だよな」

ルークが突然言った。

「え？」

「お前がアッシュみたいな性格だったら、『弱肉強食だ！屑が！』とか言って、あっさり受け入れるんだろうな」

「ルーク・・・それはちよつと言いきすぎじゃない？」

ルークがアッシュの声真似をすると本気で違いがわからない。

その場にアッシュがいるような錯覚を味わって、二人は小さく笑った。

「けどさ、それもきつと強さなんだと、俺は思う。」

アッシュは強いんだ。そういうのをきつと、割り切っていると思う」

「・・・ルークは？割り切れていないの？」

「・・・どうだろうな。わかんねーや」

ルークはそう言って、夜空を見上げた。

「・・・わかんねーのか。やっぱりお前は甘いな、ルーク」

そこへ、突如として声が聞こえた。

先ほどルークが声真似した通りの声であった。

「うお！？ア、アッシュ！？」

「ふん」

ルークと瓜二つの顔を持つ剣士・・・アッシュは、ルークとカウスを睨みながら近寄る。

「今回の件、俺は別の依頼を受けていたから関われなかったが・・・。

何をそこまで思いつめる必要がある？」

お前達はやるべきことをやった。それで十分なんじゃねえのか？」

「それは・・・その通りなんだけど」

「なら、顔を上げる。選んだ以上はな、選ばなかったから犠牲になっちまったものに、謝る事すら許されねえんだよ。

だったら、犠牲になった連中に対して、胸張って生きることしかで

きねえだろ」

「・・・・・・・・」

正論だな、とカウスは思った。

そこまで思えるアッシュは強い人間だと。

アッシュは、今度はルークを見た。

「てめえも、皇族ならそのくらい理解しやがれ。

人の上に立つ人間は、そういう問題に必ず直面するもんなんだからよ」

「・・・・・・・・」

アッシュはそう言つて、甲板から艦内に戻ろうとする。

「待てよ、アッシュ」

「あ？」

ルークが呼び止める。

「・・・・ありがとな」

「・・・・は？」

「・・・・なんでもねえ」

「・・・・・・・・」

二人の会話は途絶えた。

アッシュが立ち去ろうとする。

しかし、呼び止めてもないのに今度はアッシュのほうが止まった。

そのまま、カウス達に背中を向けたまま言う。

「俺は、今回のお前らの行動を、間違っているなんて思つてねえ。

・・・・こうして、今も悩んでるお前たちの姿でさえ、な」

そう言つて、アッシュは艦内へと戻つていった。

「悩んでる姿も・・・・？」

「間違つていないってよ。・・・・たく。どっちが甘ちゃんなんだよ」

苦笑しながら、ルークは呟いた。

「疲れた」

独り言を呟いて、カウスは自室のベッドに体を預けた。

「・・・けど、寝れないな」

何故か寝付けない。

軽く暇を潰せるものは無いかと思って、

「あ。カノンノから借りた小説」

それを思い出して、ベッドの横の本の束に手を伸ばした。

「あれ・・・？」

本の間に、一枚の紙が挟まっている。

「なんだ、これ？」

見覚えの無いその紙を取り出してみると、それはギルドに提出される依頼書だった。

依頼人は。

「・・・アルベルト、神父」

何故だか、背中につめたいものが走った。

依頼内容は、メスカル山脈での神父の護衛。

ただし。

今度は一人で。

「・・・・・・・・」

この紙がカウスの部屋に置かれていたということは、これはギルドに宛てられた正規の依頼ではない。
カウス個人に対しての依頼だ。

カランと、何か硬いモノが落ちる音がした。

どうやら、依頼書の裏に何か貼り付けていたらしい。
カウスが依頼書を読んでいる途中で、それが落ちた。

足元に転がった細長いソレは、

「・・・・・・・・」

暗い部屋の中で、ソレは銀色に輝いていた。

何故、こんなものを依頼書に貼り付けたのか。

「——あ」

ふと、最悪の予想をした。

だが、それは信じられなかった。

だって、それは最悪だから。

「・・・・・・・・でも。それじゃあ」

だが、その最悪の予想が真実ならば。

この依頼が意味するところは何なのか。

「・・・・・・・・わかりました」

カノンノは助かり、森の住人達から恨まれはしたけれど、あの森は死なずに済んだ。

それで、今回の事件は幕を落とした。

だけど、この事件の幕切れに納得していない人物が一人いるらしい。

「受けて・・・・・・・・立ちます」

部屋の中で一人、カウスは呟いた。

「ディセクターと代価」（後書き）

ルークとユーリは、私にとって対称なイメージを放つキャラクターです。

なので、そういう趣向を随所にちりばめてみました。

テイルズキャラの持つ味をスパイスとして、物語に振りかけるイメージで練っていますので、

やっぱりオリジナル寄りではあるかもしれませんが。

それから、私の中ではギルドのメンバーはそれぞれ依頼を受けて仕事をこなしているため、

皆が揃っている事はあまりありません。

今更な説明ですよね…… 申し訳ありません。

次はどこまで行っても補足的な話でしかないので、それほど長くない予定ですし、

既存のテイルズメンバーがあんまり活躍しないかもしれませんが、もし良かったらお付き合いください（汗）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！
それでは、失礼します。

〈余分な真実〉（前書き）

この作品は『世界樹の落とし子へ 〈ディセンドーと代価〉』の続編です。また、題材がレディアントマイソロジ―2のため、ディセンドーとして私のオリジナルなキャラクターが出てきます。ご注意ください

く余分な真実く

エピソード 『余分な真実』

『こんな私にも、愛するモノはある』

-
■
-

欠損と不足。

彼が生まれてから今日に至るまで、得たモノはそれだけだった。

-
■
-

メスカル山脈の入り口。

バンエルティア号から降りたカウスと神父は、そこで立ち止まっていた。

「依頼を受けてくれてありがとう。」

「すまないね。昨日の今日で、もう一度私に付き合ってもらうのだから」

神父がそう言った。

しかし、態度はあまり申し訳なさそうでは無かった。

「いえ・・・神父さんには、カノンノを助けてもらいましたから・・・。」

それに、昨日までの依頼は結局達成できませんでしたから、今回こそは神父さんの目的を達成するお手伝いをしたいんです」

「そうか。ありがとう」

カウスは、依頼の内容を頭の中で確認する。

依頼主の護衛。

依頼を出したのは今カウスの目の前にいるこの神父である。

解毒剤に関する知識を豊富に有する、病魔に蝕まれた人々を助けることを生業としている、神に仕える男だ。

この依頼は、チャットを通したギルド全体への依頼ではない。

あくまで、カウスに宛てられた依頼である。

チャットには事情を説明し、カウスはこの『個人的な依頼』を受注した。

神父の目的は、メスカル山脈に生えている高山植物であった。

「私が所有する薬草の中で、ここで採れる物が不足してきていてね。せつかくだから、こうして採りに来たわけだ」

「どんな薬草なんですか？依頼書に書いてくれれば、僕たちが採取しますよ？」

そのカウスの言葉に、神父は目をつぶりながら頭を振る。

「いや・・・これもなかなか見つけづらい植物なんだ。

私が行動したほうが早い」

「そうなんですか」

神父の言葉に、頷くカウス。

「神父さん、本当に薬草に詳しいんですね」

「ふふ・・・ほとんど趣味の範囲だね。

特に、『解毒』に関しては、それなりの知識を持っていると自負しているよ」

神父はそう言つて、うつすらと笑った。

「『解毒』に関して詳しいんですか・・・『毒』にも、詳しいんですよね？」

カウスは、表情を変えずにそう神父に聞いた。

神父は目を瞑つて

「ああ。もちろん」

そう一言だけ返事をした。

歩き出す神父。

カウスは、その背中から少し距離を置いて・・・神父の護衛という依頼を開始した。

彼女は、そこで長い眠りから目を覚ました。

「う．．．うん．．．」

ぼんやりとした意識のまま、体を起こそうとする。

「カノンノツ！！」

「わあっ！！」

すぐ傍で、パニールの大声が聞こえた。

驚いて、ぼんやりとした意識は一気に覚醒した。

「良かった．．．！！目が覚めたのね、カノンノ！！」

「ど、どうしたの？パニール？」

「あなた．．．昨日からずっと眠ったままで．．．ずっと苦しそうで．．．」

本当に心配したのよ、カノンノ．．．」

パニールが安堵しながら涙を流す。

「え．．．？パニール．．．？」

カノンノは、その状況が理解できないでいた。

「カノンノ！」

今度は、エステルが医務室に入ってきた。

どうやら、パニールの大声が廊下にまで響いていたらしい。

「エステル．．．？」

「よかった！目が覚めたんですね！私、みなさんを呼んで来ます！」

「あ、わ！ちよ、ちよっと待ってエステル！」

部屋から飛び出そうとするエステルを、カノンノが慌てて止めた。

「はい？なんです？」

「あ、あのさ．．．私に、何があったんだっけ？」

カノンノは、少し照れながらそう言った。

「はあ！！てやあ！！」

襲って来る魔物たちを、カウスは剣で倒していく。

魔法剣士として鍛えた彼は、剣術に関しても他のものに引けをとらないまでに成長している。

純粋な剣士と剣術のみで勝負しても、ある程度までは競り合えるだろう。

「・・・すごいな、あの人、本当に神父さんなのか？」

しかし、そこまで強くなったカウスでも、神父の動きには驚くほか無かった。

「ふんっ！！」

アルベルト神父の動きもまた、常軌を逸したものであった。

神父は、『拳』で戦っている。

自分が知りうる格闘技とは微妙に違う動き。

神父は、迫り来る魔物たちを悉く『一撃』でしとめる様に立ち回っていた。

「ふむ・・・こんなところか」

であつた魔物の群れを蹴散らし、神父が一言呟いた。

「・・・やっぱり。あの森で魔物と戦ったときから思っているんですけど。」

神父さん、強いですね。僕の護衛なんて、本当に必要なんですか？」

「ふふ、無論だ。私ごときが強く見えるかね？」

光荣だが、買いかぶりすぎと言つものだ。

私は、集団を相手にする事が苦手だね。誰か私の背中を守っていてもらわないと、存分に戦えないのだよ」

神父の言葉に、カウスは

（苦手って・・・よくまあ、そんなこと言えるなあ）

神父の前に散らばる5体の魔物の亡骸を前に、そんな事を思った。

「あの。神父さんは、どうしてそんなに鍛えているんですか？」

歩いている途中、カウスが聞いた。

「ん？私の武術のことかな？」

「はい。なんていうか・・・神父さんなら、やっぱりそんなに強くなる必要なんて、無いんじゃないかと思ったんです」

カウスの言葉に、神父はうつすらと笑みを浮かべた。

「そういえば、昨日ユーリ君にも言われたな。ただの神父なら、そんなに鍛えている必要は無い、と」

「・・・・・・・・」

「だが、これも修行の一環であつたと言えば、納得できるかね？」

「修行・・・ですか？」

「そうだ」

神父はそう言つて、横に視線をやった。

「例えば・・・あそこにいるエレノッサスを見たまえ」

神父の視線の先には、エレノッサスが2頭いた。

お互いに体をぶつけ合っている。

「縄張り争い・・・ですか？」

「いや、あれは彼らの習性のようなものだ。

ああやって互いに傷付けあうことで、彼らの牙はより太く、強固になつていく」

神父はそう言つて、今度は自分の拳を見た。

「君はこんな言葉を知っているかな？」

『健全な精神は健全な肉体に宿る』という言葉だ。

私は職業柄、常に健全な精神を宿していなくてはならない身でね。まだ幼い頃から、父の薦めで武術を習っていたのだよ」

「そうなんですか・・・」

「ああ。こうして自らの体を鍛え上げ、より自分を強くする。そう

することで、道に迷ったものを導く力を備えることが出来るかもしれない。

私はそう考えて、修行に没頭した」

神父の言葉に、カウスは頷いた。

修行とは、自分の体を痛めつけることだ。

少なくとも、痛み無くして人は強くなることは出来ない。

神父はあの魔物たちのように、自分の体を傷つけ、そうやって体を鍛えていったのだろう。

「健全な精神は健全な肉体に宿る……ですか。

うーん……その割には、アドリビトムのメンバーは……」

カウスは、苦笑しながら呟いた。

「どういう意味かね？」

「いえ……あのギルドのメンバーは皆、強いです。

だけど、神父さんの言う、『健全な精神』を持っているのかは……

ちよつとわからない人も何人かいますから」

言いながら、カウスはゼロスの存在を思い出す。

それからチェスターとスパイダ。

強いけれど、彼らを健全と呼んで良いのかどうか。

おかしくて、小さく笑った。

「なるほど……だが、その者達も君にとって大切な仲間なのだろう？」

神父はカウスに聞く。

カウスも苦笑をやめて、真面目な顔で神父の質問に頷いた。

「……はい」

「ならば、やはり間違っではないいな、この言葉は」

神父はそう言っ、再び黙り込んだ。

「……」

「カウス君。君は、届かないモノを欲したことは無いか？」

「はい？」

神父が突然話題を変えた。

「届かないものつていうと・・・」

「いや・・・気にしないでくれ」

そう言つて、再び黙り込む神父。

先ほどから、神父との会話が弾まない。

（当然だ）

カウスはそう考えて、再び神父の背中を守るように行動した。

- 4 -

「私・・・そんなに危ない毒を受けてたんだ・・・」

驚きの表情のまま、カノンノは呟いた。

「本当に良かったわ・・・カノンノを助けてくれて、ありがとう」
「さいます！」

パニールがエステルに向けておじぎをした。

「そ、そんな！私は何もしていません！」

カウスや、アルベルト神父さんがいたから、解毒剤の材料を取つて
こられたんですから」

「そんな事ないよ。ありがとう、エステル！私、みんなにお礼を言
つてくるよ。」

元気になったつて、教えに行かなくちゃ！」

そう言つて、カノンノはベッドから降りようとした。

しかし、それをパニールとエステルが止める。

「ダメよカノンノ！まだ休んでいないと！」

「そうです！カノンノさんが目を覚ましたことは、皆さんに伝えて
きますから」

エステルはそう言つて、医務室から出て行つた。

「・・・うん」

ベッドから降りようと思つたら、目の前がぐらついた。

毒は無くなったが、体はまだ弱っているようだ。

カノンノはそう考えて、パニールたちの言うとおりに大人しくすることに決めた。

「気分はどう？何か欲しいものはある？」

「えっと、そうだなあ・・・」

カノンノはそう言っ、少し悩んだ。

と、再び医務室の扉が開いた。

「はい、カノンノ。元気い？」

ハロルドが医務室に入ってくる。

「ハロルド！」

「およ！？目が覚めてるじゃん！早いわね。大した回復力よ」

まるで何事も無かったかのように、カノンノの傍に寄ってくるハロルド。

その不思議な雰囲気、カノンノには少しおかしかった。

「なーに笑ってるのよ」

「う、ううん！なんていうか、ハロルドを見ると、さっきまで危なかったなんて信じられないなあって思っ」

カノンノがそう言っ、ハロルドも笑った。

「なーに言ってるの。それを言ったら私だっ、信じられなかったわよ。」

私、今朝まで用事でこの船にいなかったんだから。

あんたが未知の毒にやられて、それも解毒し終わっ、たなんて、後の祭りにも程があるわよ！」

ハロルドはそう言っ、両腕を広げてため息をついた。

「後の祭り・・・っ」

カノンノが苦笑する。

「んあ？そうでしょ？だっ、て、せっかくの未知の毒の分析が出来なくなっ、ちゃっ、たんだから」

ハロルドはそう言っ、またため息をついた。

未知の毒。

カウス達は、そうカノンノや他のメンバーには伝えていた。

『ヒドラの毒』だと伝えてしまえば、それを解毒するために何が必要か、それを手に入れるために何をしたのか、カノンノにまで知られてしまう。

それを配慮して、カウス達は未知の毒という存在で誤魔化した。

「せめて、その毒がどうやってあんたの体に入ったのか、それだけでも調べてやろうと思って、あんたに聞きに来たのよ。」

それで？虫にでも刺されたの？

ハロルドの突然の発言に、カノンノは驚く。

「わあ・・・よくわかったね、ハロルド」

「あら？当たったの？」

・・・ふん。今回は珍しく一番可能性のありそうな事を言って、あえて外してやろうと思ったのに、まさか当たるとは・・・。

それで？どんな虫に刺されたの？」

「えっと・・・それはわからないんだ。私が寝ていた時に刺されたから・・・」

「はあっ!？」

カノンノの言葉に、ハロルドが驚く。

「寝てた・・・て、何？寝てるときに刺されたの!？なんでえ!？」

「え・・・なんでって言われても・・・」

「あんた達さあ・・・野営をするときに、結界は張らなかったの？」
「・・・え?」

ハロルドの言葉に、カノンノは呆気に取られた。

ハロルドはカノンノの様子を気にせず話し続ける。

「結界を張らないで眠るなんて、ちよつと油断しすぎじゃないの?」

「ま、待って、ハロルド!」

「んあ?何?」

「結界は・・・張ったよ?」

「・・・・・・・・」

カノンノの言葉に、ハロルドは黙った。
しばし考え込む。

「あのさ。結界は破られてたの？」

「え・・・・あれ・・・・どうだろ？」

「じゃあ破られて無いわね」

カノンノはまだ何も答えていないというのに、ハロルドはそう結論を出した。

カノンノは、口を開けたまま止まっている。

「な・・・・なんで？」

「だって、あんた達が持っていた結界って、このバンエルティア号で配ってる奴でしょ？」

あれ、私が改良したやつなのよ」

「・・・・え・・・・そうなの？」

「そう。誰だったかしら・・・・頼まれたのよね。」

それで、結界としての性能アップ！結界を破ろうとする奴や、結界を突破する奴がいれば、

警報を鳴らすオマケ付きよ！」

「そ・・・・そうなの？」

ハロルドの言葉を聞いて、カノンノは頭が真っ白になった。

「あ・・・・もしかして、改良がされていないのを持っていたのかも」

「そうなの？でもさ・・・・」

ハロルドが腰に手を当てて話す。

「市販のキャンプ用結界だって、『虫くらい』通さないわよ？」

だって、結界を通過できるのは結界を破れる力を持った生き物だけなんだから。

あんた達が侵入されても気付かないような虫に、結界は突破できないでしょ」

「・・・・・・・・」

ハロルドの言葉を聞いたカノンノは、しばらく動かなかった。

「・・・えっと、どういうこと？」

カノンノが質問する。

ハロルドは

「つまり、『結果の中にいた誰か』が毒を持っていたってことでしょ。それが一番可能性が高いわよ」

そう、つまらなげに答えた。

「あゝあ。未知の虫とかの発見が出来るかと思ったのに・・・まあいいわ。」

それじゃあカノンノ、お大事にね〜」

そう言つて、ハロルドは医務室から出て行った。

「カノンノ・・・？」

心配そうにパニールが声をかける。

「・・・えっと」

カノンノは、その声に反応できなかった。

ハロルドの提示した可能性に、ただ呆然とすることしか出来なかった。

- 5 -

カウスと神父は、山の中腹まで辿り着いた。

「・・・見つけたよ」

神父はそう言つて、足を止めた。

カウスも足を止める。

「これだ」

神父が一本の草を摘み取る。

「見つかりましたか・・・良かったです」

「ああ」

カウスの言葉に、神父は答える。
しかし、二人は次の言葉を続けない。

依頼は達成したと、神父は言わず。

バンエルティア号に戻りましょつと、カウスは言わない。

二人とも、黙つたまま時間が過ぎる。

お互いに、次に相手が何を言うか、待っている。

メスカル山脈に吹き付ける風が、うるさい。

カウスは、妙な焦りを感じた。

真相はわかっている。

だが、それは自力で辿り着いた答えではない。

むしろ、それを導いたのは他ならぬ目の前にいる黒い神父である。

その意図は何か。理解できない。

「・・・神父さん」

沈黙に耐えかねて、カウスは言葉を発した。

「なにかな・・・？」

神父は、呟いた。

「——カノンノに毒を与えたのは、あなたですね？」

「——ああ。そうだ」

あっさりと。

神父は、己の悪行を認めた。

それが別段大したことではないという風に。

神父は、己の悪をカウスに伝えた。

その神父の姿に、カウスは恐怖した。
何の罪も無いカノンノに、どういった理由で毒を仕込んだのかはわからないが、それでもこの神父はカウスにとって『憎むべき』敵である。

だというのに、カウスは怒りを覚えるよりも先に恐怖した。
目の前にいる男は、一体『何』なのか？
何故、カウスと1対1で対峙したのか？

「・・・・・・・・僕を、殺すつもりですか？」

真相に気付いた自分を殺すためなのかと、カウスは推測した。
しかし、神父は首を振った。

「君に危害を加えるつもりは無い。・・・君が私に攻撃を仕掛けない限りはね」

まっすぐにカウスを見たまま、神父は答える。

神父の言葉には、嘘をついている様子は無かった。

「あの依頼書・・・なんで僕に渡したんですか？」

「君に依頼を頼みたかったからだ」

「じゃあ、何であの依頼書の裏に『毒針』なんてくつつけていたんですか？」

「毒を塗っていない以上、あれはただの針なのだがね・・・あれを君に見せたのは、それを見て君は何を思うか、試したかったからだよ」

「え・・・・・・・・？」

神父の答えに、カウスは戸惑う。

「試すって・・・何を・・・」

「私の悪意に気付くかどうか・・・有り体に言えば、私を疑うかどうか。それを試した。」

「・・・まあ。今回は、君は私の期待に応えてくれたよ」
「・・・・・・・・今回は？」

カウスはそう問いかける。

そこで神父は、何かを思い出したように、ああと呟いた。

「いや・・・前回もなかなか楽しませてもらいはした。」

一応、私としてはおおむね満足な結果だよ」

神父は小さく笑った。

だが、それはカウスの仲間達に向けていた笑みではない。
心の底から、何かを愉しんでいる人間が浮かべる笑み。

ぞくりと、悪寒が走った。

カウスは、神父の笑みに、人間では無いものの存在を感じた。

「満足・・・なにが・・・」

「何故、カノン君に毒を仕込んだのか。」

何故、ヒドラを倒すと言った君達について行ったのか。

何故、こうして君に真実を話しているのか。

簡単な話だ」

神父は言葉を切って、カウスを見る。

まるで、娯楽を共に共有しようと、カウスを仲間として誘うように
手を伸ばして。

「それが私にとって——楽しいからだよ」

なんでもないことのように、そう言った。

「た・・・の・・・しい・・・?」

カウスは、神父が何を言ったのか理解出来なかった。
頭は理解できたが、心がソレを否定した。
だってそれは。

「な・・・なんで・・・そんなこと」

「理由は無い。」

君は、趣味というものを持っているかね?
それと同じだと思ってもらって構わないよ」

淡々と、しかし楽しそうに神父は話す。

そこには何の邪気も無い。

本当に、なんでもない当たり前の楽しいことを話すように、神父は続けた。

「他人から見れば大変な労力を要する作業でも、その人にとっては楽しい事があるだろう？」

他人から見れば理解できない事でも、その人にとっては楽しい事かも知れない。

そういった趣味と、全く同一のものだよ」

それは、例えば。

プレゼントをくれた女の子へのお返しに、アクセサリを作る細かい作業を趣味だと言った彼女。

知識を吸収することが楽しくて、たくさんの教養に関する本を読む彼女。

物語を追うのが楽しくて、たくさんの物語を読んだ彼女。

そういったありふれた趣味と呼ばれるものたちと、同じものだと言った神父は言った。

「あ………」

「つまりそういう事だ。

理由無く、ただ『楽しい』と感じる事柄。

趣味や娯楽。

私にとってはソレが……『人の苦しみ』であった。
ただそれだけの話だ」

神父はまるで、憑き物が落ちたように安らかな笑みを浮かべた。
本当に、気分が良いと、言葉にせずとも伝わってくる表情だ。

その表情が。

カウスには、畏怖すべき対象でしかなかった。

「本気ですか・・・？本気で・・・そんな事を・・・思っているんですか・・・」

己を支配する恐怖に負けじと、カウスは神父を睨む。

しかし、神父はその言葉に首を振った。

「いいや、違うな。これは趣味と呼べるものではない。

なぜなら、それは許されざる邪悪だからだ」

神父はそう言つて、カウスを見る。

先ほどもまでの楽しそうな雰囲気は消えてなくなり、虚ろな目で見た。

「そういう意味では、今回は二重の意味で君達には期待していた。

私の趣味と、私の目的。

趣味のほうは、先ほども言つたとおり概ね満足だ。

だがね・・・目的のほうは・・・残念ながら達成できなかった」

神父はそう、ため息混じりに言つた。

「目的・・・？」

「そうだ」

「それは、『メディアの涙』を手に入れるということ・・・？」

カウスの言葉に、神父は目を細めて小さく笑う。

「あんな時代遅れの薬草に、今さら用はない」

「・・・」

カウスは神父を睨んだ。

その時代遅れの薬草のために、カノンノや、自分達がどれだけ苦しんだのか、この神父は理解しているのかと。

（・・・理解、しているのか）

そう考えて、気分が悪くなった。

この神父は、他者の苦しみを『楽しい』と言い切つた。

その言葉に偽りが無いならば、この神父は他人の苦しみをよく理解

しているのだろう。

理解していなくては、楽しめないのだから。

「ああ。目的は達成できない。前回の、もう私は理解した。君と関わる理由は無いかとも思っただが、せつかく『世界樹の落とし子』にこうして出会えたのだ。

このまま別れを告げるのは、少しかり惜しいと思っただけでな」

神父の言葉は、カウスには理解できない。

神父は、そんなカウスの様子を意にも介さず、話を続けた。

「そう。前回の出来事。『毒に侵された彼女』を優先するか、『あの森とヒドラ』を優先するか。実を言うとな・・・私は、君には後者を選んで欲しかったと思っている。

何故だかわかるか？」

神父は、試すようにカウスを見下ろす。

カウスは、神父のその威圧的な態度に、まるで神聖な者を相手にしているかのような錯覚を感じた。

「考えるまでも無い事だろう？」

それこそ『世界を救済する意志』に間違いないからだ。

単純な数の問題だ。彼女一人の命と、ヒドラを含めたあの森に住むものの命。

そら、始めから答えは出ているでは無いか。

真に世界を救うものであるならば、森の生存を選び取らない筈が無い。

・・・ディセクター。君は、何のために世界を救う？ いや、救った？」

神父は、無表情のままカウスに質問をした。

「・・・・それは、世界が好きだから・・・・じゃダメなんですか？」

「ならば重ねて問おう。君は何故『世界が好き』になったんだ？」

「・・・・・・・・」

「仲間が居たから・・・あのギルドのメンバーが、人間が居たから。だから君は世界を救いたいと思ったのではないかな？」

「・・・・・・・・」

神父の言葉に、カウスは頷いた。

それと同時に、神父は顔つきが険しくなる。

「そんなものは、断じて『世界を救済する意志』などでは無い。

それは『人間が人間を救う意志』でしかない。

私はな・・・デイスンダーは・・・冷酷な自我を持ち、常に多く命を救う選択をするために何も迷わないような存在だと、そう思っていたよ。

そして、そういう存在に聞きたいことがあった・・・」

「聞きたいこと・・・？」

カウスが神父に尋ねる。

しかし、神父はカウスから視線を逸らす。

メスカル山脈の遠景を眺めたまま、彼は口を開いた。

「だが・・・君ではダメだ。君は・・・私の疑問への答えは持ち得ない・・・」

弱々しく、神父は言葉を紡いだ。

カウスはこのとき、初めてこの神父の『人間らしい』部分を見た気がした。

「あなたの疑問・・・って」

「言っただろう。君には答えられないと」

神父はそう言っ、険しい顔をする。

明確な怒りが、そこには刻まれている。

「『人間』である君には、私の存在を許すことは出来ぬ」

「え・・・？」

神父は、そのまま両腕を広げて、カウスに背中を向けた。

まるで、メスカル山脈に広がるあらゆる風景をその手で抱きとめようとするように、彼はたたずむ。

「カウス君。君は、世界が美しいから救うのかな？ 違うだろう。君は世界を美しいと思ってはいるかもしれないが、それが理由で世界を救ったりはしない。なぜなら君は、世界の穢れを許せないからだ」

カウスは答えない。

神父は続ける。

「考えても見たまえ。例えば、あるところに一人の『殺人鬼』がいたでしょう。

この殺人鬼は、幼い頃に受けた精神的外傷が原因で、全ての人間を憎悪の対象とし、片っ端から殺し続ける存在だ。

誰の説得も聞かないで、死ぬまで殺し続ける。

そう。まさに世界の穢れだ。

このような存在がいた場合・・・君は許すことはできるか？ 認めることが出来るか？」

カウスは答えない。

だが、その目が明確に答えを語っていた。

彼には、そんな存在を認めることは出来ない。

もし、出会った人を片っ端から攻撃するような人が居れば、カウスは止めるだろう。

「そうだな。許せない。それが『常識』だ。

何も間違っていない。君は正しい。

だが・・・」

神父は目を瞑る。

ゆっくりと、口を開く。

「存在することすら許しがたい殺人鬼・・・世界に居ないほうが良い者達・・・」

それらも間違いなく『世界の一部』であるとは、思わないか？」

「……え？」

「罪深きもの。あつてはならないもの。」

だがしかし、それらは間違いなく『生きている』のだ」

神父の言葉に力がこもる。

「生きているのならば、否定することは許されない。誰にもだ。……そうは思わないか？」

君が、彼女を救うために起こした行動を考えたまえ。

『森』を殺す。

たった一人の『彼女』を救うために。

それは……君にとって、彼女がまだ生きていたからだろう。

そしてそれは、あの森に生きるものにとって明確な悪である……
「……それが間違っているって言うんですか？」

カウスの質問に、神父は顔をしかめた。

「人の話をちゃんと聞きたまえ。私はその行動を否定しない。」

それは実に『人間らしい感情』だ。

人間として生まれた私に、それを否定することは出来んよ」

「……人間として、生まれた？」

カウスは、神父の今の発言に違和感を覚えた。

しかし、神父は構わずに独白を続ける。

「私が言いたいことはな。世界とは、すなわち罪惡にまみれた者達、これからも繰り返される悲劇、そうした負の思念を含んだ物でもあるということだ。」

そして、それらは決して無くなる事の無い、世界の一部品であるということ。

君達が汚らわしいと罵る存在にも、願いがある。

生きている以上、個人には個人の持つ願いがある。

それを否定することは誰にも出来ん。

なぜなら、その存在を生み出したのは……願いを持つ人間を生み出したのは……

他ならぬこの世界だからだ」

神父は一言そう言つて、広げていた腕を下ろした。

もう語ることはいないと言わんばかりに。

「世界は穢れてなどいない。理解したまえ。醜いと罵る者も、また醜い。

ならば、誰も醜くなど無いだろう。どんな願いも醜くなど無い……故に、世界は穢れなど持ち得ない。

世界は、こんなにも美しい――。

世界を美しいと認めるためには、そうした憎悪、罪悪、悲劇。それらもまとめて受け入れてやらねばならない。

君にはそれは、出来ないだろう？」

「だからあなたは、他人を苦しめたいっていうあなたの願いも穢れていないと……

そう言つつもりなんですか……？」

「……」

「それだって……あなたの勝手な主観だ。

そしてそれは、あなたの言い訳だ」

カウスはここに来て、はじめて怒りを露にした。

神父は言う。

この世に悪は無いと。

悪を定める人間こそ、悪であると。

「あなたがカノンノにした事は、本当にただの『悪』だ。

カノンノが毒に苦しんで、あなたは何を得た！

僕達を苦しめて、あなたに何の利益があつた！！」

カウスは言葉をぶつける。

神父の許しがたい行動。

目的が見えてこない、神父の言動。

理解不能なそれらを振り払うために、カウスは自分の心を怒りで染めた。

「・・・・・・・・」

しかし、神父は顔色を変えない。

「始めに私の目的は話したろう」

「僕を試すためだと、そう言いましたね」

「そうだ。それが理由だ」

「・・・・・・・・！！そんな事で納得すると思っているのか！！」
激昂する。

仲間を苦しめた理由が、あまりにも突飛過ぎる。

デイセNDERに、聞きたいことがあったと、神父は言った。

そのために、カノンノを苦しめた理由が、カウスには理解できなかった。

「・・・・・・・・先ほど私は、デイセNDERは冷酷であると言ったな。
何故だと思う？」

平等に世界を救うモノは、それ以外あり得ないからだ。

デイセNDER伝説には諸説あるが、そのどれもが人間を救う物語でしか無かった。

無論だ。

そのデイセNDER伝説を紡いだ者が、人間だったからだろう。

「・・・・・・・・私はな、それに疑問を持った。デイセNDERは『世界を救う者』であって人間を救う者ではない。

きつとデイセNDERならば、世界の全てを見通し、その上で平等な判断を下すだろうと・・・・・・・・」

きつとデイセNDERならば、何が救われるべき存在で、何が滅ぼすべき存在なのかを見定めるだろうと・・・・・・・・」

神父の言葉は、段々と怒りの色を帯びていった。

「デイセNDERならば、あるいは・・・・私に世界の意志を見せてくれると信じたのだ。

人間の持つ、人間が創った理念、道德、倫理などに興味は無い。
あるのはただ。

この世界自身の意志、法、裁きに……私の身を委ねたいという願
いだけだ！」

神父は叫んだ。

それこそ、彼の本当の目的だと言わんばかりに。

「……君のような『人間』には、私を救うことは出来ん。
無論、私を裁くことも出来ん……」

否定することは出来ても、関わることは出来ないのだよ」

荒げた声を一度落ち着かせて、神父は小さく言った。

カウスには最後まで、神父の言葉を理解することは出来ないと、そ
う思った。

- ■ -

自分のおかしさに気がついたのは、父親から薬草学について学んだ
時だった。

自分は、薬草よりも、毒草に興味を持っていると気がついた。

自分は、人を救うよりも、人を苦しめるほうに興味を持っていると
気がついた。

自分は、人の生よりも、人の死のほうに興味を持っていることに気
がついた。

ただそれだけの、存在するだけで人を苦しめる邪悪。

自分はそんな邪悪では無いと信じて、男は自分を戒める旅に出た。
だが、どこで誰と出会おうとも何も得られなかった。

長い旅路の中で何を救おうとも、自分が救われたことは無かった。
得られるはずが無い。救われるはずも無い。

なぜなら男には、それしか無かったのだから。

苦しみしか愉しめない、そんな邪悪しか無かったのだから。

神父として、人を導く仕事をしながら。
悩みを告げる人間に、更なる苦しみを与えてやりたいと、そう思い
続ける自分が居た。

ディセンドー伝説。

ディセンドーは、世界を救う者。

ならば、その存在こそが、自分を戒めるだろう。自分は何者なのか
を明確に教えてくれるだろう。

そう思つて、神父は自分で自分を変えることを諦めた。

それから彼の悪行は、表沙汰にならない程度に進行していく。
いつか、世界の救世主が、自分を殺しに来るかもしれない。
その時に、問うのだ。

『何故、私はこの世に生まれた』

その答えさえ聞ければ、男は満足して死ぬつもりだった。
彼はそうやって、今まで生きていた・・・。

- ■ -

- 6 -

神父との問答は終わりを告げた。

こんなにも、意味の無い会話は他には無いだろうと、二人は思った。
理解できない。

理解を求めていない。

正しくない。

正しく在ろうとさえしない。

カウスにとって、人間を人間と見ない神父は許しがたい悪であり。

神父にとって、ディセンダーでありながら人間の味方しかない『当たり前の人間』であるカウスは、特別気にかける必要も無いありふれた正義だった。

神父がカウスを睨む。

その姿を見て、カウスは一つ気になっていたことを思い出した。

「あなたは・・・あの時、怒っていましたね？」

「ん？」

「ヒドラの子供がいるってわかったとき・・・あなたは明らかに怒っていた。

何に対して怒っていたんですか？」

カウスの言葉を聞いて、神父はああ、と頷く。

「そのことか。何、大したことではない。世界を味方につけているような君の存在そのものに対して怒りを覚えたのだよ」

「え・・・？」

「ああ・・・そうだな。『世界樹の祝福』とでも言うのかな？」

「・・・全く。失くし物を減らそうとするのは良いことだが、それが自分ではなく他人の、それも世界の手によるものなど、些かズル過ぎるのでは無いか・・・？」

神父の顔には怒りと呆れが入り混じっている。

しかし、カウスには神父の言っている言葉の意味がわからなかった。

「考えてみる。あの場における最高の『苦しみ』は、『生の輝き』

は、あの森を殺しても彼女を救うというその独善、欺瞞に満ちた正義感では無かったか？

だというのに、なんだあの結末は！

期待はずれにも程がある。

結局、『森』は死ななかった。

森の住人達も、君達を許しはしないが、それでも森が死ぬと決定したかもしれない場合とは比べ物にならないほど君達に対する怨嗟は

弱まっただろう」

神父は淡々と、言葉を続ける。

「ああ。本当に、君は私をことごとく失望させてくれる」

神父はそう言つて、カウスを見下した。

カウスは、その視線に真つ向から睨み返す。

「つまり、あなたは・・・僕達が、もつと苦しむ姿が見たかつたつてことですか。

あの時、ヒドラは子供を身ごもつてなんていなくて、僕達は本当に森を殺していて、

森の住人達は、そのために住処を追われて・・・僕達を殺したいほど憎んで。

そんな出来事を、期待していたんですか・・・？」

「ああ、もちろん。君は私の期待を裏切つたのだ。

ならばせめて、そのくらいは愉しませて欲しいと願つたのだが、その願いさえも君の幸運と偶然によつて叶わなかった。

あるいは、そういう風に世界が動くことこそが、君がディセンダーである所以なのかとも考えたよ」

「・・・もういいです」

神父の言葉を遮るように、カウスは言つた。

しかし、神父は構わずに続ける。

「あの森が死ねば、もつと愉快だったのだが・・・いや、まったくもつて不快だ。

君のその、もつとも犠牲が少なくて済む展開を呼び寄せる祝福が。

ディセンダーという存在は、自分の行いによつて生じた罪を少しでも薄める力でも持っているのかね」

「もういい！」

カウスが叫ぶ。

神父は、うつすらと笑いながら、言葉を止めた。

「・・・もういい。あなたみたいな人は、初めてだ」

「光栄だ。私のような純粋な悪は、今までいなかったか」
カウスが剣を抜く。
神父は腰を落として身構える。

「自分が悪であることを、認めるんですか？」
「変える事の出来ない在り方なのだ。ならば、悪であるという烙印くらい、甘んじて受け入れる」
カウスが一歩進む。
神父も、一歩足を進めた。

「自分が間違っているってわかっているのに、人を苦しめるんですか？」
「もとより、何が正しいのかもわからぬ現世だ。ならば、自分の好きな事に没頭するくらい、構わないでは無いか」
カウスは、神父のその言葉を本気で憎んだ。
神父は、心底つまらないと言った表情で、カウスを見下した。

—— 駆ける。

カウスは、目前の長身の神父に一気に接近する。
「ふ！」
剣を振る。

神父を殺すための一撃ではなく、無力化するための一撃。神父の足を狙ったの攻撃。

「ふん」

しかし、神父はその剣撃を右ひざで受け止める。
ガンッ！

金属の衝突音。

「な！？」

驚くカウス。

神父は、法衣の下にプロテクターのようなものを装着しているらしい。

「私も、武装くらいしている」

神父はそのままカウスのがら空きの胸目掛けて拳を打ち込む。

「——くっ！」

とつさに後ろに下がり、回避する。

しかし、神父はカウスの後退に追隨する。

「な……！」

「………」

カウスの目の前に、神父の顔が迫る。

一瞬のうちに間をつめられた。

すべるように間を詰める、一瞬の早業。

神父は体を捻り、カウスの体に背中から激突するように体当たりした。

「——ぐっ!？」

「ふん」

鉄山靠。

接近した姿勢から相手に肩や背中をぶつけるように体当たりをし、ダメージを与える技である。

神父の体当たりを喰らい、カウスはそのまま後方に吹き飛ばされる。しかし、そのまま倒れることは出来ない。

倒れれば、神父の追い討ちが待っているからだ。

「く！」

両足に懇親の力を込めて、倒れまいと姿勢を戻す。

神父が迫る。

（一度退くと、一気に追い詰められる……!）

ファラやセネルとの鍛錬を思い出す。

彼らの強さは、接近してからの怒濤の攻撃にあった。

剣士では真似ることのできない、超接近戦での連続攻撃。

格闘家の強みとは即ち、至近距離からの波状攻撃、逃げようとする

相手こそ追い詰めて仕留めるその圧倒的な手数にある。

神父の接近に臆することなく、カウスは剣を構えた。

「虎牙破斬！」

跳躍しながら切り上げる。

「ぬ・・・」

神父は接近を止め、カウスの剣を顔面ギリギリでかわす。

「くらえっ！」

虎牙破斬の二撃目。切り下ろし。

相手に向かって跳躍しながらの二段攻撃は、相手の出鼻をくじく威力がある。

神父の肩口にカウスの剣が迫る。

「——っ」

神父が目を細めて、二撃目を迎え入れる。

肩に当たると思ったその刹那、神父は体を捻った。

だが、それでもカウスの剣はあたる。瞬間移動でもしない限り、神父の位置ではカウスの攻撃を喰らってしまう。

「——な！？」

避けられない筈の攻撃を、神父は避けた。

違う。カウスの剣があらぬ方向に振り下ろされた。

「・・・・・・」

バランスを崩し、カウスは地面に肩から落ちた。

「ぐ・・・」

そのまま、横向きの視界の中で神父の姿を捉える。

（信じられない・・・剣を素手で押した——！？）

神父は体を捻ると同時に右手の掌をカウスの剣に押し当て、そのまま剣ごとカウスの体を押したのだ。

縦向きに振り下ろされる剣に、横向きの力を加えて軌道をずらす。

理屈の上では簡単だが、カウスの剣閃はそれほど甘い一撃ではない。魔法剣士として鍛えた彼の剣は、既に一人前の剣士とも対等に渡り

合えるであろうレベルにまで達している。
その一撃を、神父は難なくいなしたのだ。
最初の足元への一撃と、虎牙破斬の切り上げ。
その二撃だけで、神父はカウスの剣を見切った。だからこそいなす
事が出来る。

その所業、既に人間業では無い。
あつという間に、カウスは敗北した。

- 7 -

「・・・ここまでか？」

神父がカウスを見下ろす。

「・・・・・・・・」

カウスは黙ったままにいる。

「まったく・・・本当に君はどうかしている。なぜ本気を出さない
？」

神父の質問に、カウスは驚く。

カウスが本気を出していないことを、この神父は看破していた。
本気で戦うとは即ち、本気で殺そうとすること。

カウスには、神父を殺す気は無い。

「・・・・これでも、結構本気で戦っているんですけどね」

「嘘だな。あの森の戦いを見ていれば、君の実力がこんなものでは
無いことくらいわかる。」

「どうやら、本当に私を殺したくないらしいな？」

「・・・・・・・・」

「人間を殺すのは気が引けるかね、ディセクター？」

神父は、笑みを見せながらそう言った。

彼は今、愉しんでいる。この状況を。

ディセNDERが激昂すれば、もしかしたら殺されてしまつかもされない。そういう状況でも相手の苦しみを見ていたいと願う、彼の趣向は正気の沙汰ではない。

神父は、相手の苦しみを見て自身の幸福を確認する人間なのではない。

彼は、『苦しみや嘆き』こそ美しいと感じ、そのためならば自らの命も省みない、破綻者なのだ。

「……僕は、あなたに償ってもらいたいです。カノンノを苦しめたこと。森の住人と僕達を戦わせたこと。ヒドラの命を奪ったこと。

それらの罪を……償って欲しいだけです」

カウスの言葉に、神父は笑みを崩さない。

ヒドラの命を奪ったのは実質的にはカウスであるが、神父はそこにはあまり関心を寄せなかった。

「償いか。残念だが、私は私の行いを罪だと認識していない。償いとは、罪に対して謝罪の念を持って行われる行為だろう。

そもそも罪を認めていないものに、罰を与えることは出来ても償わせることなどできぬよ」

「まるで子供の言い訳ですね」

「そういう意味では、子供ほど世界の悪を体現した者達はいないということになるな」

「まさか……世界の未来を作る存在が、悪であるわけないでしょう？」

「それが間違いだ。悪にも未来を作ることはできる」

神父は倒れたカウスの傍による。

「しかし、皮肉な話だな。

悪である私が、自身の悪性を取り除くために鍛えた武術が、こんな形で君を苦しめるとはな。

まったく。世界樹は何を思っ君のような『まっとうな人間』を生み出したのか。

理解に苦しむよ」

「僕はあくまでも人間だって言うんですか？」

「そうだろう。多くの人間がソレこそが正しいと信じる事柄を、君も正しいと信じられる。」

友愛の情を正しいものだと思はれる。

生死を問われれば生きることと正しいと選ぶことができる。それがどこにでもいる当たり前の人間でなくて何なのだ」

神父は一度、顔をしかめた。

しかし、すぐにもとの無表情に戻る。

と、何を思ったのか。突然神父はカウスから離れた。

「立ちたまえ。そして、私を殺しに来なさい」

そう言つて、戦いの再開を求めた。

「・・・・・・嫌です。あなたを殺すつもりは無い」

カウスは立ち上がり、神父を睨む。

「あなたを殺しても、あなたはきっとそれに満足する。」

そんなの、僕は納得できません」

「そうか・・・・・・では。君を心配してやってきた彼らに、君のその偽善のツケを払ってもらつたでしょう」

「え・・・・？」

カウスが振り返る。

そこには、双子の剣士がいた。

「アッシュ！？ルーク！？」

「ふん」

「よっ」

アッシュは鋭い目つきのまま、ルークは軽く片手を挙げながら、カウスの元へと来ていた。

「な、なんでここに」

カウスが驚きながら、二人に問う。

アッシュは、剣を鞘から抜きながら言った。

「ハロルドから教えられた。カノンの奴が毒にやられたのは、人間の仕業だと。」

「・・・その時点で疑うべき相手なんぞ、一人しかいねーじゃねーか」

「俺も話を聞いたときは正直信じられなかった。」

けど、今の状況でもう十分だ。・・・あの神父さんは俺たちの敵なんだろう？」

「・・・」

ルークの問いかけに、カウスは答えない。

今回の一連の事件の原因は、目の前にいる神父であるのは間違いない。

しかし、神父を敵であると断言することが、何故だかカウスには出来なかった。

「ちっ・・・甘いな、カウス」

アッシュが舌打ちしながら、神父に剣先を向けた。

「てめーのような悪党の存在を、俺は認めることは出来ねえ。」

覚悟しな・・・お前は俺が倒す」

アッシュの言葉に、しかし神父は笑みを崩さなかった。

「・・・きたまえ」

神父がそう言ったのと同時に、アッシュは神父目掛けて走った。

「穿衝破!!!」

神父の体目掛けて突きを繰り出す。

体を捻って、最小限の動きでかわす神父。

アッシュはそのまま神父に接近し、左拳でアッパーを放つ。

アッシュの拳が神父の顎に迫る。

「がっ!?!」

しかし、アッシュの攻撃は神父には届かなかった。

アッシュのアッパーと交差するように、神父の掌底が突き出されていた。

そして、その掌底はアッシュの攻撃よりも早い。

「ぐっ・・・舐めるなあ！」

体勢を立て直し、跳躍するアッシュ。

特技・崩蹴脚だ。

アッシュの跳躍からの蹴りを、神父は腕を交差させて防御する。

「まだだ！通牙連破斬！！」

そのままアッシュの剣が迫る。

「ぬっ！」

神父の腕にアッシュの剣が入る。

神父の法衣が破ける。しかし腕には剣が入らない。

腕にも、プロテクターが付けられていた。

しかし、アッシュは構わず剣を振り切る。

そして、突き出される左掌底。

烈破掌と双牙斬を組み合わせたその技は、相手の体を大きく吹き飛ばす威力を持っている。

その一連の動きの一部、烈破掌を炸裂させた。

「・・・な、にい？」

「・・・」

烈破掌を喰らってなお動じない神父がそこにはいた。

「くっ！」

アッシュがバックステップを踏んで距離をとる。

通牙連破斬の攻撃を最後まで繰り出すことはできなかったが、それが正解であるとアッシュは直感していた。

少なくとも、あのまま剣を振り上げる動作まで行っていれば、確実に反撃を受けていたはずである。

「——っ、ふ」

神父の口元から血が一滴流れる。

だがそれだけだ。

烈破掌が炸裂した。通常ならば相手を後方に吹き飛ばすほどの威力を持った技である。

だがしかし、神父はその技を体一つで受け止めた。

「今は・・・なかなかだ。切れ味の鋭い気迫に圧されてしまったな」

言いながら神父が構える。

腰を低くし、突撃の姿勢をとる。

「――！！アッシュ、気を付けて！」

「――！！！」

瞬時に神父が動く。

一瞬で10の距離を0に詰めるダッシュ力は、初見ではまず間違いない。裁ききれない。

「はっ、せいっ――！」

アッシュに接近し、連環腿を放つ神父。

とっさの動きに反応しきれず、アッシュは体ごと蹴り上げられる。

「うっ！ごは・・・」

ドサリと、アッシュは地面に落ちた。

「アッシュ――！」

ルークがアッシュの傍まで走る。

神父の追い討ちがアッシュに迫っていたからだ。

「この野郎――！」

ルークが剣を振るう。

しかし、それはいつものルークの剣の鋭さを持っていなかった。

神父は、先ほどアッシュに切られた方の腕、露出したプロテクター部分でルークの剣を受ける。

「仲間を心配する気持ちはわかるが、人を傷付けることに恐怖した剣で切りかかるのは感心しないな」

ルークの剣が弾かれる。体勢を崩すルーク。

その隙について、神父がルークに掌底を打った。

「がっ――！」

大きく飛ばされるルーク。

二人の剣士が、地面にうずくまった。

「・・・・・・一体、あなたは」

カウスが呟く。どう考えてもおかしい。

二人とも卓越した剣士である。その二人が、こうも短い間に動けなくなるほどのダメージを受けるとは、信じられなかった。

「一撃必殺という言葉がある。

これは実に慈悲深い言葉だと思わないかね？

私は精神的苦痛こそ愛しているが、肉体的苦痛にはそれほど興味は無い。

戦う相手の意識は、出来る限り早く飛ばすように心がけている」

神父はアッシュとルークを見る。

「まあ・・・彼らはまだ意識を保っている。

大したものだ・・・その若さで、精神的にも肉体的にもそこまで強くなるとは」

神父はそう言っ、倒れた二人には目もくれずにカウスの傍まで近寄る。

- 8 -

「さあ。君の番だ。仲間を苦しめられなければ、全力で私と戦いたまえ」

神父が迫る。

「・・・・・・・・」

カウスは無言で剣を構えた。

その姿を見て、神父は笑った。

仮にもディセnder。世界を救うために世界樹が生み出した存在である。

その存在は神父が望んだようなモノでは無かったが、それでも『世界が世界を救うために』生み出した存在である。

その存在が本気を出した時・・・その時にもかしたら何かを発見

できるかもしれない。

神父はそう考えていた。

殺されても構わない、それでも見つけたい答えがある。

「ゆくぞ、ディセNDER！」

神父は、目の敵目掛けて疾駆した。

カウスも踏み込む。

即座に接近する両者。

そして。

「やめてくださいっ！！」

「！？」

「なっ！？」

少女の悲痛な叫びを彼らは聞いた。

「カ、カノン・・・？」

敵を目前にして、カウスは振り返った。

そこには、毒で苦しめられた件の少女がいた。

息も絶え絶えに。

顔は青ざめ、足は震えていた。

それは、まだ体が完全に回復しきっていない体でありながら、無理してここまで来たという証であった。

（——って、敵は目の前なのに！）

カウスは、敵を前にしていたことを思い出して、急いで神父の方に振り返った。

だが、神父も動きを止めていた。

見れば、神父も驚きの表情を浮かべている。

険しい顔つきはそのままに、しかし目つきは信じられないものでも見たように見開かれていた。

「・・・・・・・・バカな」

神父が呟いた。独り言ですらない。

それは、本当に無意識のうちに口をついて出た言葉だった。

「はぁ．．．はぁ．．．」

ふらふらと頼りない足取りでカノンノはカウスへと近付く。

「カノンノ！来ちゃダメだ！」

カウスが叫ぶが、しかしカノンノは歩みを止めない。

「私も．．．戦うよ．．．」

そう言つて、剣を構えるカノンノ。

と、そんな彼女を心配するように別の声が聞こえてきた。

「無理をするなど言つたはずだぞ、私は」

「クラトスさん！？」

クラトスがそこにいた。

どうやら、彼女をここまで連れてきたのは、クラトスらしい。

「平気ですよ、クラトスさん．．．」

「．．．．．やはり連れて来たのは間違いだったか」

クラトスが呆れたようにため息をついた。

「く．．．」

「いつつ．．．」

と、ルークとアッシュが立ち上がった。二人が立ち上がり、戦線に復帰する。

神父を囲むように、カウス達は対峙した。

「私は．．．私達の大切な仲間を．．．傷付ける人は．．．許しません！」

苦しそうに、だが確かな意志を持って、カノンノは神父に言葉をぶつけた。

「．．．．．」

しかし、神父はその言葉をまるで聞いていない。

むしろ、カノンノがこの場にいる事に、本当に驚いているようだった。

「なぜ・・・その体でここまで来た」

神父が呟く。

「なぜって・・・そんなの・・・」

カノンノが神父の言葉に答えようとする。

しかし、言い切る前に体が倒れそうになった。

「カノンノ！」

カウスがそれを抱きとめる。

体が熱い。本当に、とんでもない無茶をした上でここまでやってきたのだと、カウスは理解した。

「・・・そんなこと、問われるまでも無い、か」

神父がぼそりと言った。

「仲間が大切か・・・自らの命を賭けてでも守る価値があると」
そう言つて、神父は目を瞑った。

薬草学に詳しく、毒にも詳しいからこそ。

アルベルト神父にとつて、今のカノンノはありえない存在だった。

確かに解毒は行われた。しかし、ヒドラの毒によって蝕まれた体はそんなにすぐに回復するものではない。

体内のあらゆる器官が、まだ弱ったままのはずなのだ。

少なくとも1週間ほどの安静は必要な状態である。

立っていることすら辛いだろうに、カノンノは魔物が徘徊するこのメスカル山脈を歩いてきた。

見れば彼女を連れてきたであろう護衛は一人。彼女自身、足手まといにならないように戦ったりしただろう。

それは、仲間を思う気持ちがあればこそその行動。

「有り得ぬよ・・・本当に、君達はどこまで私を不快にさせれば気が済むのかね」

神父はそう言い、カウス達に背を向ける。

「え・・・？」

「もう、最後の興味も失せた。ディセNDERなどに己の願いを託したことが間違いだった。

この世界は汚れているのか、美しいのか。

私は美しいと思っているが、世界はどう思っているのか。

それを聞こうと思っていたのだが・・・君は世界などでは断じて無い」

カウス達に背を向けたまま神父が歩き出す。

「ま・・・待ちやがれ!!」

ルークが言う。しかし、神父はルークの姿を一瞥すると、すぐにまた歩き出した。

ルークの存在を無視するように。それは、アッシュに対しても同じだった。

『もう用は無い』と。

神父は、口にせずとも全身からその言葉を発していた。

そのままルークとアッシュを素通りする。

しかし、その先には何も無い。神父が背を向けている方向とはカウス達が上ってきた道であり、つまりは出口である。

神父は出口とは別方向に歩く。

神父は切り立った崖の傍まで歩みを進めた。

「愛するとはどういうことかな？ディセNDER」

止まって、神父は背を向けたままカウスにたずねた。

カウスは自分が抱きとめているカノンノを見る。

意識が朦朧としているようだったが、カノンノはしっかりと神父の背中を見ていた。

その姿を見て、カウスは確信を持って答えた。

「・・・わかりません。だけど、人が人を愛することも愛されることも、素晴らしいことだと思います」

友情も愛情も信頼も心配も、人が人を想う気持ちは全て素晴らしいはずだと、世界樹の落とし子は言う。

「そうか。その一点においては、完全に私とは相容れぬな」

神父はそう言つて、カウスの方を振り向いた。

神父の目が虚ろな感情をカウスにぶつける。

「私はただの一度も、人が人を想うことを、美しいと、素晴らしいと感じたことは無かった」

それは、他人を愛することも、他人から愛されることも、全く大事なことだと思えなかった男の言葉だった。

「だが・・・」

神父は再び背を向ける。

そして。

「こんな私にも、愛するモノはある。・・・君達が愛せないモノが、それだ」

そう言つて、神父は崖に向かって跳んだ。

「——あ」

あつという間の出来事だった。

黒衣は翻り、神父は消えた。

「・・・・・・嘘だろ」

ルークが呟いて、急いで崖まで近付いた。

崖下を覗く。

しかし、神父の姿は無かった。姿なんて見えなくなるほど深いところまで落下したのだろうか。

だとしたら、神父は既に——

「まさか。あれだけの達人が、この程度で死ぬと思うか？」

クラトスが言った。

「え？クラトス・・・あの神父の戦いを見てたのか？」

ルークが驚いてクラトスに聞いた。

クラトスは目を瞑つて首を振った。

「私がここに来たのは本当についさっきだ。あの男がどの程度の使い手なのかは見ていない。しかし・・・あの男が纏う気は、間違い

なく達人のソレだった。

過酷な鍛錬、修行の果てに得る気迫を纏っていた」
クラトスはそう言っ、カウスの傍へと近付く。

「大変そうだったな、カウス」

「・・・はい」

カウスは頷く。

そして、クラトスをジト目で睨んだ。

「っていうか、どうしてカノンノにこんな無茶させたんですか・・・？」

これでまた体を壊しちゃったかどうか？

その言葉にクラトスは申し訳なさそうな顔をする。

「しかし、彼女がどうしても言っ、引き下がらなかったのだ。

私も何度も止めたほうが良いと言っ、たのだが・・・」

「ごめん・・・なさい・・・」

カウスとクラトスの会話を聞いていたのか、カノンノがか細い声で
そう言っ、た。

「私・・・あの神父さんが私に毒を与えたんだっ、て事に・・・気が
ついて・・・そしたら、

カウスがあ、の神父さんと・・・二人でクエストに出かけているっ、て
聞いたから・・・」

それで心配になっ、て、いてもたっ、つてもいられなくなっ、たのだと言っ、
今度は、カウスが申し訳なさそう、な表情を見せ、た。

「あ・・・っ、て事は、僕があ、の神父さんの依頼を受けたのが原因な
のか・・・

あ・・・ごめん！カノンノ！」

カウスがそう言っ、と、カノンノは微笑んだ。

「でも、良かった・・・みんな、無事で」

そう呟いて、カノンノは目を閉じ、た。

すぐに聞こえてくる寢息。

どうやら、精根尽き果て眠ってしまったようだった。

「……………」

カノンノの眠る顔を見て、カウスは思う。

カウスにとって、この少女を始めとしたあのギルドのメンバー達。仲間のために、世界のために、ともに戦う仲間達。

それを守るためならば……もしかしたらディセnderである自分も、世界を敵に回すかもしれない。

それが、人間らしいとあの神父は言った。

人間として生まれながら、人間になれなかったあの神父の言葉だ。

人間ではないのに、人間として生きている今の自分とは全然違う立場にいる神父。

(……少し、あの神父さんが可哀想かもしれない)

思ってはならない事を思った。

何が原因であの神父の人格はあいう風に形成されたのかはわからない。

もしかしたら、原因なんて無いのかもしれない。

だとしたらさらに哀れだ。

カウスにとって、素晴らしいと思えるモノが、あの神父には一生理解できないのだから。

(……いいのか。あの人も、好きなモノはあるって言ってたもん
な)

カウスにとっての仲間の存在が、神父にとっては他者の苦しみだった。

到底、置き換え不可能な価値だが、そのために命を賭けるという姿は何となく否定する気になれない。

あの神父とは、運がよければ——否、運が悪ければ、また再び会うかもしれない。

- 9 -

バンエルティア号に戻ったカウスは、すぐにカノンノを医務室に連れて行き、そこで寝かせた。

その後、休むまもなくチャットに報告に行く。

「チャット・・・今回の依頼だけど・・・」

依頼人や依頼内容があまりにも特殊であったため、報告には時間がかかった。

そしてカウスの一言。

「あの神父さん・・・最初から依頼を達成させる気が無かったって事は、報酬も無いんだ」

この一言に、チャットは

「いえ・・・多分、これがあの人から受け取った報酬です」

曖昧に笑いながら、神父の持ってきていた鞆をカウスに渡す。

鞆の中身を空けるカウス。

そこには、信じられない量のガルドが入っていた。

「・・・何・・・このガルド・・・」

カウスは、呆然と目の前の大金を見つめた。

「悪人の癖に律儀なんだな・・・よくわかんねー奴だよ、本当に」

「中に手紙も入ってたからね。確信犯だよ・・・」

報告を終え、食事をしようと向かった食堂でばったりユーリと鉢合わせたカウスは、機関室での一連の出来事を、ユーリにも話した。

ユーリも事件の当事者である。あの神父については話しておいた方が良かったからだった。

ちなみに、手紙には『依頼受注に感謝する。依頼達成の成否に関わらず、このガルドを受け取って欲しい』とだけ書かれていた。

「けど、本当に意味わかんねー奴だったな。」

なんだ？デイスンダーに聞きたいことって・・・そんな事のために一人の命を危険にさらしやがって・・・」

「まあ・・・人間には色々いるって事なんじゃない？」

「おいおい・・・そんな連中、人間だなんて思うなよ？」

俺は昔住んでいた国で、それこそ人を人とも思わねーような連中を見たことあるけどよ・・・

そういう連中は人間じゃないんだって、こっちも思ったほうがいいぜ？考え方が違いすぎるんだよ、あーいう連中とは」

ユーリの言う『あーいう連中』とはどういった連中なのか、カウスにはわからなかったが、ユーリはそういう人たちと戦ってきた経験があるのかもしれない。

だからこそ、神父に対してすぐに違和感を抱けたのだろう。

「ユーリの言う人たちと、あの神父さんは似てたの？」

カウスの質問に、ユーリはすぐに答えなかった。

少し考え込むようにする。

そして。

「いや・・・人間らしい考え方をしないって点では同じだけど・・・」

なーんか違うんだよな・・・あの神父は。

なんていうか・・・もっと質が悪い感じだな、ありゃ」

そう、曖昧に答えた。

事件の当事者達には今回の出来事を伝えてまわった。

そして、一番の被害者・・・カノンノが眠っているであろう医務室

へカウスは向かった。

ノックする。

「カウスだけど・・・カノンノ、起きてる？」

「あーはい、どうぞー」

扉の奥から声が聞こえた。

カウスはそのまま扉を開けて中に入った。

「大丈夫？具合はどう？」

「平気だよ。心配かけてごめんね」

カウスの質問に、カノンノは笑顔で答えた。

カウスは部屋の隅にたてかけてある椅子を持って、カノンノが寝ているベッドの横に椅子を置いた。

座って、カノンノと話しやすいようにする。

「あの人から依頼の報酬を貰ったよ・・・ちょっと変な話だよね」
カウスの言葉にカノンノも驚いた。

「え！？あの神父さん・・・報酬なんか用意してたんだ」

「うん・・・一応、そういう形式にはのっとる人なんだね」

「そっか・・・もしかして、依頼内容は嘘だったけど、依頼自体は本当だったのかな・・・」

「・・・？」

カノンノの呟きに、カウスは首をかしげた。

それを見たカノンノが、どう説明するか考えこむ。

「えっとね・・・私達に伝えた依頼は嘘だったんだけど、私達に解決して欲しい問題は本当にあったんじゃないかな・・・っていうことなんだけど」

カノンノのその言葉に、カウスは驚いた。

その顔を見て、カノンノは照れたように笑って手を振る。

「あ、あはは！やっぱり変な予想だよな？なんだか本当によくわからなかった人だよな」

「ううん・・・すごいよ、カノンノ。ちゃんとあの人の事、見れたと思う」

カウスはカノンノに、あの神父の目的を話した。

細かいところで不明な点は多かったが、あの神父はディセクターに尋ねたいことがあったのだと。

そのために、尋ねるに値する相手かどうか確認するためにカノンノに毒を仕掛けたのだということや、その果てにディセクターとの殺し合いを望んだことを。

最後まで、何かを探していた神父のことを。

「………なんだか、寂しい人だね」

「寂しい？」

「うん。その人はきつと、安心できる場所が無かったんだよ。だから……よくわからないものを探しているんでしょ？」

私も、ニアタの声を両親の声かもしれないって考えながら……それに期待しながら旅を続けていたから、わかる気がする……」

「………」

カノンノの言葉に、カウスはただ呆然とした。安心できない。

確かに、それが理由だったのかもしれない。だが、それならばあの神父とカノンノとの間にある決定的なまでの断絶は何なのか。

「ダメだよ、わかる気がするなんて言っちゃ……」

「え……」

カウスは、天上を仰ぎながら言った。

「あの神父さんとカノンノは違う。全然違うよ。」

カノンノは、答えを手に入れるために、人を苦しめたりしないよ」

「カウス……？」

あの神父にはそれが出来た。

いや、あの神父は他者の苦しみこそ嬉しいと言い切った。

つまりは、そういう人格だったのだ。

そう……割り切るしか無いではないか。

「どうして、人は安心できないんだろうね。なんで、追い求め続け

るんだろうね・・・」

カウスの呟きは、誰に宛てたものでも無かった。

あるいは、あの神父がカウスに聞いたかったこととは、それなのかもしれない。

なぜ、世界は悪を認めないのか。

なぜ、自分のような存在が世界に生まれたのか。

なぜ、自分には他者の苦しみしか愉しみが無かったのか。

そういう原初の疑問、自分の存在そのものが持つ疑問を世界に対して聞いたかったのかもしれない。

なるほど、確かにそれならば、自分と同等の存在でしかない人間には答えは出せない。

あの神父に答えを出せるものなんて、世界だけだ。

そして、ディセンダーである自分も人間なのだから、あの神父の疑問に答えてやることは出来ない。

「カウス・・・ありがとう」

突然、カノンノにお礼を言われた。

「助けてくれて。私、みんなとこうして一緒にいられること、改めてすごく素敵なことなんだって実感できた。生き延びることが出来て、本当に良かったって、心のそこからそう思うの」

「・・・」

「だから、ありがとう!」

飛び切りの笑顔でそう言われて、カウスは胸が痛むのを感じた。

しかし、それだけの笑顔を向けられて、こちらも笑顔を返せないのはあまりにも失礼すぎると思え、

「僕も、今日はカノンノに助けられたよ。ありがとう」
とびっきりの笑顔を返した。

「また明日からよろしくね!カウス!」

「よろしく・・・って、カノンノ、しばらく安静でしょ?」

「あ・・・ああ。そうだった。ん・・・」

「退屈なら、本でも読んだら？」

「本？そうだなあ・・・あ、そうだ！私が貸した本、読み終わったの？」

「あ、あ・・・一冊、あと数ページで終わるってところで、色々あったから・・・」

「まだ一冊も読み終わってないや」

「そうなの？」

「けど、すごく面白いと思ったよ。うん・・・読み終わったらすぐにカノンノに感想を伝えるよ」

「あ、それ楽しみだなあ！男の子の意見って聞いてみたい！」

「むむ・・・あまり期待されるほどちゃんとした感想が言えるかはわからないけど・・・」

「それじゃ、さくつと続きも読むとするよ」

「ふふ・・・今、これを読んでるの？」

「一番薄かった本・・・はは。ほら、タイトルは・・・」

先ほどまでの重い会話を終えて、二人は他愛も無い会話を始めた。また明日といって、それからしばらく会話が弾んでしまう。

カウスにとって、新しく読書という趣味が見つかった瞬間だった。

自室に戻り、読書を始める。

カノンノはしばらく安静なのだから、話し相手になってあげたいと思ったからであり、純粋に読みかけの本の続きが気になったからでもあった。

夜が更けるが、楽しいから読み続けてしまう。

趣味を楽しむという、あの神父が聞けば皮肉に笑いそうな出来事を大切に思いながら、

カウスは再び徹夜してしまうのであった。

—終—

〈余分な真実〉（後書き）

アラヤシキです。

いやはや……このような長ったらしい文章を読んでいたき、ありがとうございます。

私自身、ここまで長く書くつもりはまったく無かったのですが、一度ハマると止まらなくなり、

たくさん文章を付け足し、また冗長な形に仕上がってしまいました。この半分以上で終わらせるつもりだったのに、本人が楽しむとまですいですね。

必要ない言葉もバンバン入れてしまって、話がいやに長くなってしまいました……（汗）

このお話は完全に私の趣味に突っ走ったものであり、二次創作としてギリギリのラインだと個人的には思っております。

だから、書いている本人は楽しかったのですが、テイルズが好きで集まっておられる方にとってはどうであるのか……そういったひとつの実験でもあります。マイソロ自体、キャラは本物だけと本編とは別物という時点で二次創作っぽい作品ではありますし。

ということは、二次創作の二次創作で……三次創作??になるのでしょうか。

とまあ、およそあとがきらしからぬ事を書き綴りましたが。

この話も結局は私が好きなように暴走した結果ですので、そういった意味では楽しんでいただける方に楽しんでいただきたいと思います。おります。

私がテイルズに求めるもの。

それはきつと、くどいくらいの状況説明と、理解できない在り方なんです。

だから全く毛色の違う作品の登場人物を参考にしてしまうのですね。私はオリジナルキャラを練る事はできません。私は、私が好きなキャラクターの劣化コピーを作り出してシミュレートすることしか出来ないのです。

それでも、今回も個人的に満足な形で話を仕上げられました。

……予定よりだいぶ長くなってしまいましたが。あとカノンノの出版が少ない……ヒロインなのに。

というわけで、このお話はここで終わりです。

お付き合いくださり、ありがとうございます！

感想お待ちしております！

それでは、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8855v/>

世界樹の落とし子へ

2011年11月15日04時32分発行